

成・高

SEIJU

2001年
第32卷

夏
祝



謹啓

初夏の候

所一統様には幸甚の情様をお慶び申上ります。

成壽「三十三号」をお届けいたす。

この度は念持字園（鶴見文字、鶴見中言、救他）

並台湾佛教会（雲衣袋）を贈呈した折の特集号

とさせて頂いたごきまつた。

御言覧 傷きまつられた事甚です。

不順の折 貴身に法愛を祈りなご後共何ん

よりくお願ひ申上ります。

念壽

善光寺住取 黒田武志 拜上

成願寺住職 山口晴通

卓越港南感瑞祥

卓越の港南瑞祥を感じ

法燈新建菩提場

法燈新たに建つ菩提場

相求海内欲傳道

海内に相い求めて道を伝えんと欲す

永世留身護善光

永世身を留めて善光を護らん

謹啓

初夏の候

所一統様には、貴山精祥をお慶び申上ります。

成壽「三十三号」をお届けいたしました。

この度は、念持学園（鶴見文学、鶴見中言教他）並台湾佛教会（高松衣袋）を贈呈した折の特集号とさせていただきます。

御言覧 俵多うすれな草甚です。

不順の折、星野お身仏法愛を祈らるる後共何となくよくお願ひ申上ります。 今寧

善光寺住取 黒田武志 拜上

学校法人 総持学園

鶴見大学

国際的な教育研究と慈悲の精神



大本山總持寺貫首
学園主 板橋興宗



学長 高崎直道

1950年に東京大学文学部哲学科卒業後、インド政府の給費留学生としてプーナ大学大学院哲学博士コースに入学。1959年、哲学博士の学位取得。帰国後、駒澤大学専任講師、大阪大学助教授、東京大学教授を経て、1987年に東京大学名誉教授に。1992年12月に鶴見大学学長に就任、現在に至る。著書として『如来蔵思想の形成』ほか多数、日本学士恩賜賞受賞、文学博士。



歯学部

時代に即応した歯学教育。
充実した臨床教育。





歯学部附属病院

21世紀の歯科医療「開放型病院」



文学部

日本文学科

文学はエンターテイメント
日本文学を楽しむ



英米文学科

グローバルな視野を目指し学ぶ



文化財学科

21世紀の学問、未来を切り開く



大学院

● 歯学研究科(歯学専攻)

● 文学研究科

(日本文学専攻・英米文学専攻)

高度な教養と学問を極める。



歯学専攻

最先端の研究現場に立ち会う



[日本文学専攻]

上代文学、国語学、漢文字、日本史学、日本仏教学の研究



[英米文学専攻]

英文学、米文学、英語学の3つの分野の研究



短期大学部

昭和28年創立の伝統。



国文科

文学散歩や研修旅行で文学の背景を学ぶ



保育科

保育する喜びと感動



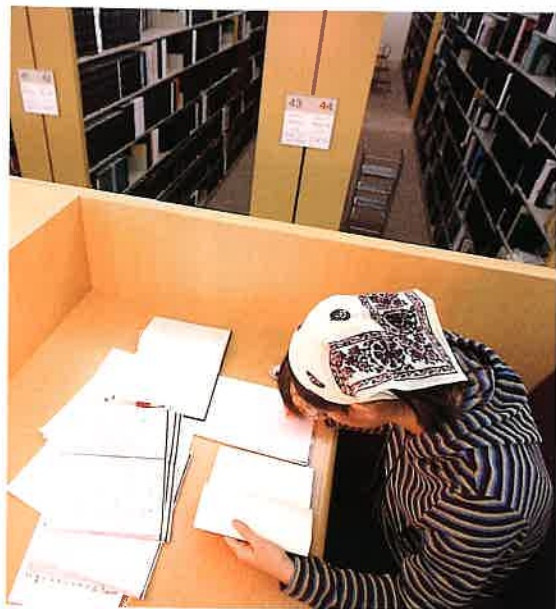
歯科衛生科

仕事を円滑に進める心構えを学ぶ



図書館

インターネットによる豊富な情報検索。
自由に本を取って読むことができる開架式図書館。
蔵書数は60万冊。



鶴見女子中学校 鶴見女子高等学校

禅の精神に基づいて心豊かな
人格を育てます。



キャンパス学びのステージ



カウ 鶴見大学 国際的視野と慈悲の精神
特別読物 二十世紀の使命
集 總持学園 大覚円成・報恩行持
● 鶴見女子中学・高等学校教育の力点
● 開放型を魁ける鶴見大学歯学部附属病院
● 文化財を学ぶ
● 仏教保育について

開山 忌 開山・煤庵白純大和尚二十三回忌嚴修—育英生へ辞令伝達
● 善光寺開山煤庵白純大和尚二十三回忌
● 不思議な佛縁（『煤庵白純大和尚』より）

追力 悼 ● 宮沢賢治を想わせる黒田先生（『煤庵白純大和尚』より）
● 「瑩山禅師の碑」黒田倫子夫人寄進 京都・清水寺の境内に

特別 稿 ● 現代中国の観音信仰
● くらしの中で読む『正法眼蔵』面授の巻・その七

寄連 集 ● 台湾仏教界へ袈裟百肩 贈呈式
● 袈裟百肩台湾仏教会へ

力行 稿 ● 仏教と日本文化
● 瘡・動脈硬化から身を守るには

寄 稿 ● 日本仏教雑感—私の目にうつった日本仏教
● 生涯ただ一筋に—曹洞宗学会の乾坤第一峯

カウ 声 128 ● 喧嘩禅
● 横浜善光寺留学僧育英会 論文要旨
● 留学育英僧 辞令交付式

読者のたよみ 134

題字・イラスト 伊藤三喜庵

巻頭言

善光寺住職 黒田 武志

西暦二〇〇一年即ち二十一世紀を迎え、善光寺界隈も花の春から緑滴る夏となり、飛来する小鳥のさえなりに忘我の一刻。気がつけばこの年も早や折り返しにあり、いかにも日月は待ってくれません。すでに諸々の機会に申し上げておりますが、善光寺は新世紀に臨んで、豊かな未来を開く寺としてその使命に燃え、仏法興隆と人類の安心・平和・幸福を祈念し、一隅に光明を与えて参りたいと誓願しております。

『成寿』夏季号は学校法人總持学園（鶴見大学、同短期大学部、鶴見女子中学・高等学校）の特集をさせていただきました。学園は總持寺ご開山・瑩山禅師の「女人済度のご誓願」の精神を今に活かそうと、大本山總持寺が大正十三年に設立し

た光華女学校にはじまり、現在では時代の趨勢によって大学・同短期大学部（一部を除く）は男女共学です。学園の教育の基本理念に「大覚円成 報恩行持」を指標とし、四摂法（布施・愛語・利行・同事）を実践目標として掲げていることは、他には見られない大きな特徴と言えましょう。

瑩山禅師は道元禅師の法を受け継ぎ、「衆生済度」を第一義として普くこれを大衆教化され、禅風を広く社会に弘められました。さらには諸山を創建、数多くの門人を輩出し、曹洞宗の普及とその基盤形成に大いなる役割を果たされました。宗門では道元禅師を「高祖」と仰ぎ、瑩山禅師は「太祖」と崇め「常済大師」として追諡、宗門の父とも母とも讃仰されております。

瑩山禅師が説かれた「平常心是道」の平常心とは外界と内面の自我から生ずる刺激に染活されず、自由に羽ばたく心の落着いたさまであり、常に変わらぬ平穩な心の世界。まこと千変万化する生活の中で、確かな生命の感覚をもつなら、これこそ悟りの生き方であり、実に美しい人生道でありましょう。私たちもこの教えに学び行じ、世界の人人々に新しい世紀が平和で豊かなものになるように、希望の光をしっかりと灯し続けて参りたいと祈念致します。

二十一世紀の使命

善光寺住職 黒田 武志



私はいつも考える。出来ることはなにか。為すべきことは何か。私に残された時間はどれだけか。この四十年間考え続けてきた。これはウズキであり、いっこうに止まらない。ありがたいことです。いつでもこの気概を持てる自分に喜びを感じます。お釈迦様の少し先輩にあたる孔子さまは、教えの第一章に「学びて時に之を習う。亦悦ばしからずや」すなわち私たちはまず人の道、仏の道、神の道を学ぶことにある。

その学んだことは、心にとどめおいて必ずなんどでも自ら練習し、実行してみることだ。これが習慣となれば、自分も高まり生きていることが実に楽しく、うれしくなる。これが「学習」という言葉の生まれでた所以だという。まことにその通りだと思います。

人間、学び実行していると必ず周囲から、遠くから実行している、その人のところに同志やいろいろな人たちが一緒に研究しよう、修行し

よう、仕事しよう」と「人が集まって来る」。これこそ「徳は弧ならず 必ず隣有り」ということだと教える。私はこの教えに啓発され、仏道を深く学び何か実行してゆくとしようそんな気概で今日まで歩いてきたように思います。二千五百年前も、二十一世紀の今もこの教え、思想はまったく変わらない。なぜ？これは「真理」だからです。

特に私は道元禅師の修証義第四章「発願利生」の魅力にとりつかれ、限りなくその教えに近づきたいと思いつづけ願いつづけている。この発願利生とは仏道を求め菩提心を発すということ、何かというと「利他」の精神と行動を発することなんだと説かれている。これこそ、君子も聖人も、仏も、神も説くところは共通している。従ってこの心こそ万人共通であり、個人も、家庭も、企業も、社会も国もこの菩提心を発すなら争いもなく天下治まり豊かに、幸福に発展していく

と教えています。

私もこの教えを基本に、三つの志をもっています。一つには祖師を通して釈尊に還る、二つには仏道を通して世界平和の祈願とそれに力をつくす、三つには利他の思想で発願利生するということなのです。私にはこの三つの智慧を二十一世紀の使命としてさらに具体的にどのように行動で示すかにかかっている訳です。この志は一朝にできたものではありません。翻ってみまするに、さいわいにして寺に生を受け、遣い難き仏法に遇い、父白純和尚の大いなる影響を受け、母の懐に抱かれ、その温もりの中で成長した。食い盛りの七人男兄弟、その五男坊。生存競争の厳しい中、私の青春は苦痛、苦悩に充ち、容赦なく煩惱の中に引き込まれていった。

やがて駒澤大学大学院を卒業、雲水として大本山總持寺に籠もる。そして日々喘ぐ。のち永平寺に雲水の末席を戴き、行往坐臥。人並みの

求道の姿勢を見せながら苦惱する。求めても求めても、いっこうに己事究明に至らない。仏道を授けられても、自分を探し出すことは安易ではない。貧困な知恵は揺れ、心身は蝕まれる。

ついには「延壽堂(病室)」に入る。この時点で、私はあらゆる機会から遠ざけられ隔絶されてしまった。何とか脱出を試みる。自分にも愛想尽きこれ以上永平寺に籠る理由を見い出せない。

乞暇する。そして東京を目指す。懐には一銭の金もない。友人に頼んでも汽車賃を満たすには程遠い。これでは一銭の無駄もできない。止む無く福井駅まで歩く七里の道程。着の身着のまま袈裟文庫を振り分け、荷物を背に網代笠、脚絆に草履履き、一目散に山を駆け下りる。善くも悪しくも逃げ出したことになる。

道すがら経をあげながら托鉢をする。追い込まれ、自ら進んでやった初めての托鉢。夕闇迫るころ漸く駅に着く、ベルが鳴り汽車が滑りこ

む。慌てて駆け込む。ホッと一安心。まもなく車内アナウンス。列車は富山經由直江津行きだと言っている。なんとする、逆方向ではないか。からだ中の力が抜け座り込んでしまった。私に方向転換の示唆。これはキット仏様のご意志。やがてこれも運命かと諦め観念する。

ここが私の運命のわかれ道。禍転じて福。これが運命を大きく変える。思うことあり、日本一周行脚の旅に出る。粗食を飯い、水を呑み、風雪を友にしながら歩いて歩いて托鉢行脚。身を以て体験し見聞する。四季を越え、漸くゴール。この過程で改めて自分の無能、無学さ、愚かさ、貧しさを認識する。それでも拙い自分がいとおしかった。今一度仏道に行ずる必要を実感。

悔い多き日々を省みながら昭和三十八年、再び大本山總持寺の特別僧堂第一期生として基本から学ぶ。私にとって大事なことは、それまで

歩いてきた道のりであり、今おるところである。どうしてもそれを見直す必要がある。過去と今に立つ現在とがわかれば、未来すなわち往く道がわかる。私は「生き方」について少しもわかっていなかった。「手を合わせ」感謝する素直な心をもっていない。本当の仏道に全身全霊を打ち込み、真剣にぶつかっていなかったのだ。ただ知っているつもり、たわかっているつもりを積み上げてきたにすぎないだから世間には通じない、いわゆるお山の大将。これが漸く分かりかけてきたから出直し、やり直しとなった次第。

山に登り、われに還って静寂の中に独り坐っている。かすかな葉音さえ心に響いてくる。その音と気配は、ある瞬間から私のいのちの充実の足音となり、生きることの喜びとなる。そして生きることの楽しみさえ覚えてきた。これは私なりのある「開眼」であった。人間だれでも大事なことは、自分を見直し、聞き直し、そし

て思い直してみることだと思う。そして学び直す、何度でもいい。繰り返すことこそ進歩、これが学習。学ぶうちまたウズク。矢も楯もたまらず仏道の原点に心がはやる。そのままインド仏跡を歩きタイに渡る。仏教の原始、上座仏教のワットパクナム寺院に得度出家する。戒律二二七に守られ一年半を過ごす。さらにその足でアメリカ本土に渡り、米人と一緒に坐禅をし、開教師として過ごす。のち帰国。仏道に帰依し伝道者としての役割を深く認識。いつしか世界観なくして仏道は語れないことを識る。はるか遠く飛鳥の時代、日本の仏教は聖徳太子により招来され開花する。釈尊の教えに基づいて、太子様は日本の憲法を草案される。それを十七か条に示されたことは誰でも承知しています。第一条に論語から「和を以つて貴しとなす」、第二条は仏教より「三宝（仏・法・僧）を敬え」と人々に篤い信仰心を求めておられます。それ以

来時代の流れに従い、幾多の高僧、名僧が釈尊の時から八万四千種類の仏の種子を求め、それこそ生命を懸け、心血を注いで仏教の「日本化とその普及」に努めてこられた。そして「仏となり」だれでも「仏となりえる」としてあい教えあい導きながら大いなる仏の心をお示しになった。そして今日に至っている。この尊い布教活動はあたかも壮大なまんだら図のようにいつでもわたしたちのそばにあります。

それぞれ拾い上げられた種子は、それぞれの土地でそれぞれの花を咲かせ、それこそ多種多様にたとえば空海、最澄、日蓮、法然、親鸞、栄西、道元と彼の高僧たち、時代と場所と理念と思想と学びにより「悟りへの道」の示し方、その花の咲かせ方に変化が生じてきた。それは限りなく枝分かれし分派しながら点から面へ発展普及しひろがってきた。各宗旨・宗派に枝分かれはしても源は同じ釈尊の教え。各宗派の入

り口は同じでも出口が少しずつ異なっている。基本的には菩提心の貴さを説いている。したがって仏教の宗旨、宗派にとられ拘ること一切なし。おそれながら私は真の仏教をあらためて原点に探り、私の視点でその真理を求め承知したかったのであります。

インドに起こった仏教がどのようなにして伝わり、どのような形でどのような国でどのようなに開花し、人々の心の救済を為し得ているのか。その為には僧侶として自分がどのような役割を担えばいいのか。漸く私なりに認識しつかむことができたように思う。結果「発願利生」に辿り着いた。

この尊い体験こそ、時空を超え私に重大な使命感を抱かせる。僅かなことで迷い苦しむ人間。そんな人々たちを救い、世界平和と人類の幸福に寄与したいと念願。その為にはいったい何を学び、何を実践し、何を残すか。それを具現化する

るため、いささかでも源泉を得たと得心する。あるいは自分なりに覚醒したといってもいい。道元禪師の謂う「菩提心を発すというは、己れ未だ度らざる前に一切衆生を度さんと発願し營むなり」仏の心を発すというは自分がまだ悟りきらなくても、まず他の人々を迷いの境地から、悟りの世界へ渡してやろうと心に誓い、行こうとだと示し、迷いと苦に満ちた世に光をあて、救済してゆくというのが釈尊の教え。世界のあらゆる宗教・聖者の説くところすなわちこれが愛であり、慈悲心あり、おもいやり、仁ということなのです。しかしながら現状は、宗教の求める安心・平和・幸福には至っていない。私の使命もここにある。み仏の教えに国境はない。差別もない。世界中の宗教家たちと方向を共有し、民族・性別・宗教を超えて、すべての人びとが真理に目覚め、安心・平和・幸福を祈りつつ、それを共有することにある。これはとても

私一人でできるものではない。「国」や「宗教」や「私」にとらわれず、釈尊の教えを正しく伝え導く力こそ、なくてはならない大事と捉え、私は人材の発掘、育成に心血をそそぐ。

具体的にはその拠点となる新寺を横浜に建立。早や開創三十三周年を迎える。すでに約三千の檀家を持つまでになる。日常の寺院活動と平行して横浜善光寺留学僧育英会を設立。このすべての基金は、多くの檀家の理解と協力の元に運営され、「法輪転ずるところ食輪転ず」の教えに従い、檀信徒の皆様にも「毎度のおかず一口だけ減らしてご協力下さい」と一人一仏を願う。これに対し日に月に年に皆様が応分にご協力くださいり実によりたいこと。この尊い浄財、一銭たりとも無駄にはできません。この基金により毎年世界中に、留学僧を公募し、目的に応じ各国に派遣。すでに派遣先二十カ国一〇〇名を送り出している。また海外からの受け入れも進

み、留学僧たちは世界に学び、そしてあらゆる国々に貢献する。これが私の具体的な「発願利生」。

留学僧たちもいささか私の願いを叶えつつあることは嬉しい。人間は誰でも心のもち方で変わる。他人の身になって考える、この心は人にも通じ視野が開けてくる。その心は、「身を削り人に尽くさんスリコギのその味知れる人ぞ尊し」。先ず自らスリコギになる。そして「宗祖を通して釈尊に還れ」をモットーに、私は地球全体を視野に入れ、国際交流を果たして行きたい。私とて残された時間はまことに微く待つてはくれません。果してこれはいつまで続けられるかわからない。

釈尊の説かれた慈悲の精神は、世界平和を樹立するための人間に与えられた英知。世界は今まさにIT革命通信・交通・情報手段の発達著しく急激に世界を狭くしている。もはや世界全

体、地球規模でものを考えなければ、経済も社会も政治も宗教も語れない。すべては国際化の時代。しかしながらIT革命というても所詮は通信手段。この普及が不可避なものではありませんが、根本的な人間の生き方や幸福感をもたらすものではありません。終局慈悲の精神によって結ばれる理想の世界こそ真の平和の実現につながってくる。いまこそ国際交流のときであり、その中で果たすべき仏教の役割は、あまりにも大きく急務である。

私は育英会設立十五周年を機に横浜市街地から多摩丘陵にさしかかる一角、六九〇〇平方メートルの宗派不問、国籍民族不問の霊園を実現した。開園と同時に一三〇〇基を販売完了。さらに集合慰霊塔建設もすでに完成、墓地のない方には納骨堂にご遺骨やご位牌のお預かりが出来るようになりました。お墓は人々の心の拠り所。永代の住い。決して霊園事業であってはならな

いと思っっている。

人間、「生老病死」生を受け死ぬまでこれは自分ではどうにもならない。この避けて通れぬ不測の事態に備えて安心することができる霊園墓地『やすらぎの郷』これこそ、私の信念する仏道の在り方であり、一切を寺が企画し開発から運営管理まですべて僧侶とそれぞれ分野の専門家が関わってゆく。此処に眠る方にもお参りする方にも癒す心に充たされるように、永遠の喜びと安らぎを提供してゆく。まさしく「治生産業。固より布施に非ざること無し」この地こそ愛語・利行・同事の実現の場だと思っております。

私はこの永遠なる郷に隣接し、いずれ世界仏教交流センターを興したいと発願している。先に述べたように、等しく世界観を持つ同志が、文化・宗教・民族を超えて、世界の恒久的不戦平和を願い、その為の国際的交流と活動の方向

を共有しながら、その情報発信基地と位置付け、これが機能する場として提供していきたい。これこそが私の終局の発願であり、利生。具体的に煮詰まっているものではない。また何時どうするかではなく、いつかそうしたいと限りなく信念していさえすれば、やがて御仏の導きがある。そして必ずや実現する。それも遠くはないと思っっている。できるも、できないも御仏のはからい、すべては天意。できるもよし、できないもよし、私はこの道を往く。それが定めであり、なすべきことと感得する。このことが道元禅師の謂う「発願利生」。要は何をするにも人材。共感共鳴する賢者が求めてやって来ると信じている。いかにも「朋遠方より来たるあり、また樂しからずや」であります。これこそ私が後世に残すべき二十一世紀への遺産だと思っっている。

□特集・總持学園□

大覚円成・報恩行持

——鶴見大学の教育の目指すもの——

鶴見大学学長 高崎直道

鶴見大学は学校法人名を總持学園と申します。これは本学が曹洞宗の大本山總持寺によつて設立された学園であることを示すものです。(ですから總持寺学園といえ、もっとわかりやすいのだ、という声もあります。)鶴見は言うまでもなく横浜市の鶴見という所在地を示す名です。JR京浜東北線の鶴見駅のすぐそばにあります。御本山のお隣りでいつもその大祖堂の臺を仰ぎ、

眺めつつ学んでおります。学園は大正十三年高等女学校の設立にはじまりますが、高等教育機関としては昭和二十八年、鶴見女子短期大学の設置を出発点としております。次いで昭和三十八年に鶴見大学文学部、昭和四十五年に同歯学部が設置され、現在は文・歯二学部(それぞれ大学院研究科博士課程併設)と短期大学部より成り、また、近年、短大部の歯科衛生科を除い

て、すべて男女共学になりました。

（本学の歴史を出発点に遡って考えるとき、女子の高等教育を指すという目標を忘れることは出来ません。これは總持寺の御開山、瑩山紹瑾禪師が、歴代の祖師の中にあつて、とくに女人の救済に力をつくされたという伝承にもとづき、その精神を現代に活かそうという理念によつて学園が設立されたことによります。これは学園の初代校長・学長たる中根環堂師の堅い信念の発露でもありました。現在は、社会の要請に応じて、男子にも漸次門戸を開くに至ったということです。）



上のような事由によつて、本学の教育の基本理念も、おのづから、仏教とくに禅の教えにもとづいたものとなります。初代環堂学長は

それを「大覚円成・報恩行持」の二句八字によつて標示されました。

大覚円成・報恩行持とは、どんな意味か。大覚とは、大いなる目覚め、ということ、^{がく}報恩の菩提樹下でのお悟りのことをさしますが、同時に、それを成就された釈尊その人をさして大覚とよぶこともあります。ここではさらに、その仏のおさとりを、われわれひとりひとりが自らのものとする（それが可能であることは『涅槃経』の「一切衆生悉有仏性」の句によつて示されている）を「大覚の円成」とよんでいると解せられます。

では具体的に、われわれはどういう実践によつて大覚の円成をめざすことになるのか。それをわたくしは、曹洞宗が日常読誦用の聖典として、開祖道元禪師のお言葉（『正法眼蔵』その他）から選んで編集した『修証義』ののつとつて、菩薩の四摂法（布施、愛語、利行、同事）の実践

に求めて、説明しております。菩薩とは発心、すなわち菩提にむけて心をおこしたものの、の意ですが、その発菩提心を『修証義』では「己れ未だ度らざる前に一切衆生を度さんと発願し営むなり」と説明し、その「衆生を度し、衆生を利益する」方法として、上の四項目を挙げています。わたくしはこの四項目の実践を、わたくしどもにとつて、また、学生さんたちにとつて、わかりやすい実践目標として掲げている次第です。（四項目の中で、さらに、私は「愛語」すなわち、他人に慈愛のこもったことばをかけるこ



と、「同事」すなわち、他人の身になって考えることを、現代人にやや欠けている、しかしなくてはならない大事な徳目として強調しております。）

そして、この四つの徳目の実践に毎日つとめることが、そのまま、釈尊の教えに報いる所以であると、『修証義』そのままに説いている次第です。

鶴見大学に学ぶ学生諸君はどこか他の大学の卒業とちがう、といわれることを、ひそかに期待している次第です。

鶴見女子中学・高等学校教育の力点

鶴見女子中学校・高等学校校長 菅原 節生

大正十三年の本校の淵源から数えて、平成十三年の今年は七十六年目となる。初代校長中根環堂先生以来の二大誓願「大覚円成・報恩行持」を堅持しつつ、本校では特に仏教行持に力点を置いている。その目的は宗教的情操、特に仏祖への敬虔な心を育み、釈尊・両祖の言動に親しむことを通して、自己の生き方を問い続ける視点を培わせようとするものである。

本校の行持はすべて「私達の学園―鶴見女子中学校・高等学校行持規範―」に則って展開さ

れている。ここではその内の主なものに絞って紹介しておくこととする。

まず、毎日の行持。毎朝の朝礼は黙念（坐禅の要領）に始まり、黙念に終わるがその間、聖歌斉唱または読経し、（一、一二、三学期の順に、般若心経、観音経偈、修証義）、普回向、四弘誓願を唱える。昼食時には「五観の偈」を唱える。

次に毎月の行持。一日と十五日（またはそれに近い日）は校長の導師で祝祷朝礼（短い校長講話を含む）がある。また報恩活動として募金



や各種ボランティア活動がある。さらに各学年に対し学期に一、二回の校長講話を行う。

三つ目に年間の行持。

その式場は、学校と本山とに大別できる。前者には釈尊に関する行持として花祭り☆（四月）、成道会（十二月）、涅槃会（二月）。両祖に関する行持として両祖忌（九月）、太祖降誕会☆（十一月）、高祖降誕会（一月）。その他、精霊祭☆（七月）、達磨忌（十月）、初代校長忌（十一月）などがある。（☆印は献灯、散華の舞、献香・献華を含み、特別時間枠にて行い、他は朝礼時に実施。）後者には授戒会参拝（四月、新入生参列）、学校授戒会（五月、高三全員、三日間。事前に学校にて説戒三回）、御忌参拝（十月、全校生徒、学年単位で）、耐寒参禅会（一月、早朝坐禅四日間、有志だが参加率八

割）等がある。

さらに本校の入学式、卒業式及び精霊祭での法要はいずれも本山禅師様（学園主）の御親修で営まれ、御垂示のあることは特筆に値する。

これらの行持をまわりから支えているのが学習環境である。後者は発心館、精進館、慈眼館、光照館、浄光館等と名付けられ、オペラ上演可能の大講堂正面には身丈二、五尺の釈迦如来像が安置されているほか、校内では多くの御像を拝することができ、中でもモロカイ観音像は注目すべき存在である。この御像は、ハワイのモロカイ島にあったハンセン病の病棟に入院していた日本人の患者さんの御要望に応えて、若き三澤智雄先生のご努力や当時の校長中根環堂先生のアドバイスによる本校卒業生等の喜捨によって造られて海を渡り、多くの患者さんに光明を与え、無事、役目を終えて本校に里帰りした菩薩像である。拝む者に同事行の尊さを気づ

かせて下さっている。(詳しくは本校機関誌『鶴の林』十二年度十二月号、一月号参照)

こうして育まれゆく情操が日常に生かされるように、本校では色々な角度からのフォローがなされている。

近年では中・高・大一貫教育がより発展するよう試みられ、また、十二年度に発足した特進コースも成果を上げつつあり、さらに、社会の要請に応えた十三年度発足の看護医療進学コースは進路指導界から熱い眼差しを浴びている。また、本校高校二年生は一九八五年以来毎年、中国への修学旅行において浙江省杭州学軍中学(年齢は日本の中学・高校生)を訪問し、交流を続けてきた。去る一月には同校からの友好交流訪日団が初めて訪日して我が校を訪れ、ホームステイを含めて友好を深めたことは、国際交流を生活実感をもつてとらえることのできる良い機会となった。



□特集・總持学園□

開放型を魁ける鶴見大学歯学部附属病院

鶴見大学歯学部附属病院長

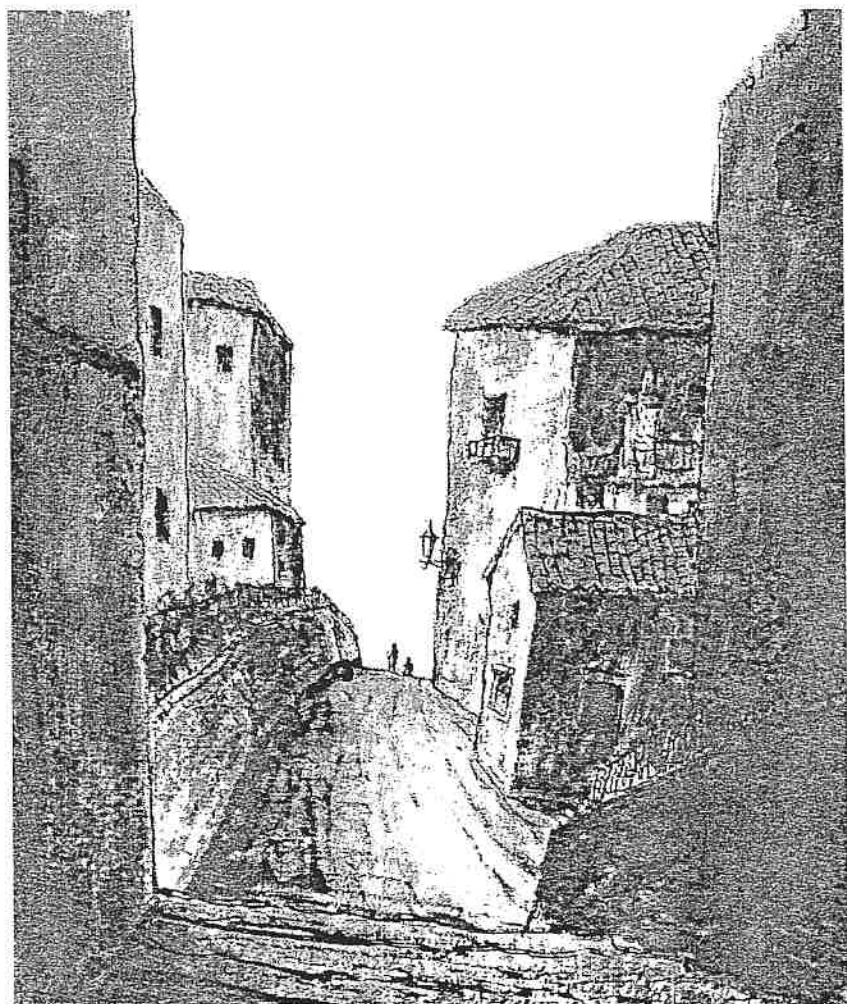
瀬戸皖一

本年三月、鶴見大学歯学部附属病院は「開放

型病院」として生まれ変わりました。開放型とは地域の医師あるいは歯科医師が大学病院に登録すれば、自由に院内に入り病院のスタッフと協同して診療することができると新しいスタイルを意味します。このようなシステムはアメリカでは一般的ですが、我が国では医科の方でもなかなか定着しておりませんでした。最近になって俄に注目されるようになり、神奈川県でも少しずつ増えつつあります。歯科では全く前例が

なく当院が全国で最初です。

当病院は紹介率六三％に達しました。これは全国の歯学部附属病院の中でも断トツで、典型的な二次三次医療機関として、地域の医科や歯科の先生から信頼をいただいている証しです。そのような背景があったからこそ、病院を開放して病診連携を一層深めることができたのです。ひとくちに歯科と言ってもむし歯や歯周病を治す保存科、入れ歯や冠を作る補綴科、歯並びを治す矯正科、子供の歯を治す小児歯科、高齢





者の歯科などいくつかの診療科に分かれております。放射線科には最新のCT、MRIなどの画像機器が完備され、これらを地域の先生方が利用するのも勿論OKです。口や顎の炎症や悪性腫瘍など様々な病気を治す口腔外科では、先端的な手術が毎日行われ、入院患者さんも大勢おられます。口腔外科の手術に全身麻酔をかけるのは歯科麻酔科で歯科医療の際の全身管理を担当しております。

つい最近まで人生五十年であったのが、日本人の寿命が僅かの間に三十年も延びたわけですから、歯科を訪れる患者さんも高齢化し、また多かれ少なかれ様々な生活習慣病を持っておられます。このような患者さんにストレスがかかる歯科治療を安全に、また快適に行うためには

周到な除痛と全身管理が必要となります。

このような場合地域の歯医者さんは大学病院に全身管理を依頼し、ここで自ら歯の治療ができるのが開放型の仕組みです。本年四月からは内科および循環器科がオープンし、どなたでも高度な内科医療も受けることができるようになりました。つまり歯科病院ではありませんが、最先端の医療サポートを重視し、医療と歯科医療ががっちりと手を組んで、社会のニーズに十分応えられるように次々と改革を断行して参ります。このような充実した歯科医療体制をバックに身体障害者、高齢者の歯科医療の後方支援活動も積極的に行なっています。

皆様、一度總持寺の前にある緑に包まれた鶴見大学歯学部附属病院を訪れて下さい。そして新しい時代の歯科病院作りを推進しているスタッフの活気を感じ取って下されば幸いです。

□特集・總持学園□

文化財を学ぶ

鶴見大学文学部文化財学科主任 大三輪 龍彦

人間が、その生活を豊かにし、便利に過ごすために考案し、造り出した器物が文化財です。ですから、文化財を研究することは、人間そのものと、人間の文化の歴史を研究することになります。鶴見大学は、曹洞宗大本山總持寺の創った大学で、人間の問題を深く追求し、正しい人間としての生きかたを求めするために開学されました。その目的を実現する一つとして、平成十

年に文学部に文化財学科が開設されています。この学科は文化財という人類の遺産を通じて人間の歴史を解明し、あわせて人類共通の大切な遺産を後世に伝えることを目指しています。

この学科には、文献資料を中心に歴史の時間的推移を明らかにしようとする歴史・地理系列、考古遺物や美術資料をとうして歴史の空間的広がりや復元を試みる考古・美術系列、先人によつ



ます。

文化財は有形の物質ですから、実物を実際に手にしての研究を欠かすことができません。そこでこの学科では一年生から四年生までを通じて実習を必修で課しています。この実習に使う教材も、複製品や模造品ではなく実物に触れさせるようにしています。それは実物の持つ真実性を体感して覚えてもらうためにほかなりません。そのためにこの学科には多くの実物資料としての文化財が所蔵されています。

長崎の船大工町の町家の、水屋の戸棚の板戸は、四枚の板戸の裏にマリア像を描いた紙が貼

て私たちの手に伝えられた人類共通の歴史的文化遗产を次の世代に伝えるための研究と実績を行なう文化財系列の三分野がおかれています。

られその後には信者の名前が墨書されています。イタリアの図書館にある史料から信者の人々は当時長崎に住んでいたセントドミニコ会口ザリオ組のキリシタンであることが判りました。この板戸は現在日本に残っている隠れキリシタンに関する第一級の史料となっています。また、マリア像を赤外線カメラで撮影してみるとその裏側に西国三十三方所観音霊場の絵が描かれていることが判明しました。文化財の科学的研究です。

文化財学科は社会との連携も重視しています。昨年は臨済宗大本山建長寺の研究委託を受けて、境内の発掘調査を実施しました。その結果、建長五年（一二五三）の創建当時から現在に至る建長寺伽藍の変遷や、庭園の池の変化など興味深い事実が明らかになっています。その際、池の中から出土した漆器は現在知られる日本で最古と思われる組椀でした。この椀は火事で焼け



て、池に投げ込まれたものでしたが、幸い、元の形や大きさを復元することが可能であったので、本学科の手で、使われていた室町時代初期の姿を新たに再現しています。鎌倉市内出土の

木器の保存処理も、鎌倉市教育委員会の委託を受けて実施しました。

今年やっと完成年度を迎える若い学科ですが、がんばっていききたいと思います。

□特集・總持学園□

仏教保育について

鶴見大学短期大学部保育科講師

(仏教保育担当)

佐々昌樹

仏教保育とは、お釈迦さまのみ教えを基に慈心不殺・生命尊重（あらゆる生命あるものを大切にし、無駄にしない慈悲の心を育むこと）を根本理念とするものです。昨今の社会風潮を反映して、現代ほど心の教育が求められている時代はないであろうと思われます。全国に数多くの保育養成校がありますが、この仏教保育を科目の中に取り入れている所は少ないのが実情で

す。鶴見大学短期大学部保育科では学科開設以来、建学の精神に基づくこの仏教保育を必修科目としていますし、昨年新設された仏教専修科でも選択科目とされており、各方面より注目されているところです。また学内には、みつる会という児童文化部があり、その活動の一環として夏休み中に全国各地で子ども会を主催して好評を博しております。この会の活動も仏教保育

の精神に基づいて行われております。

仏教は今から二千五百年程前に、お釈迦さまによって説き示されました。その正伝しょうでんの仏法である禪を道元禪師さまが中国から伝えられ、その教えを広め大本山總持寺を開かれたのが瑩山けいざん禪師さまです。お釈迦さまと道元禪師さま、瑩山禪師さまを、曹洞宗では一仏いちぶつ兩祖りょうそと申し上げますが、本学園は大本山總持寺によって設立され、一仏兩祖のみ教えに基づく教育をすることを目指しています。そして建学の精神として、「大覚だいがく円成えんじょう・報恩ほうおん行持ぎょうぢ：お釈迦さまのおさとり（大覚）にならって正しい智慧ちえを磨みがき、すべて



のものに思いやりと感謝の心をもって日々実践じっせん（行持）につとめるということ」を掲げています。

お釈迦さまのおさと

りとは、人間にはどうして苦しいことがあるのか、その原因と、苦しみを乗り越えていかに日々の生活を送るべきかを明らかにされたことです。自分が今日あるのは、想像を絶する、多くのご先祖さまより伝えられた生命いのちを受け継いでいるからです。そして他の多くの人々やもののおかげで生かされていることに気づくことによって、思いやりと感謝の心をもって真摯まじんに生きることこそが大切なのです。

私たちには、仏さまと同じ清らかな心―すなわち仏心ぶつしんと、三毒さんどくといわれる、貪とん（貪りあまじの心）・瞋じん（いかりの心）・癡ち（おろかな心）を合わせ持っています。この仏心に目覚め育はぐみ、三毒を増大させないようにする生活態度こそが大切なのです。このことは、理屈ではわかっていても、実際に実践するとなるとなかなか難しいものですが、これにまつわる問答があります。

唐の時代の詩人白樂天はくらくてんが、道林禪師に参じて

禪の修行をしていた時のことです。白樂天が仏法の大意を尋ねたところ道林禪師は、「諸悪莫作衆善奉行 自淨其意 是諸仏教」と答えました。これは、悪いことは一切してはいけない。

良いことはすすんでしなさい。そしていつも自分の心を淨らかにしなさい。このことこそ仏さまのみ教えですという意味です。これを聞いた白樂天は、そんなことは三歳の子どもでも知っていることで、そんな簡単なことを聞いたのではありませんといました。すると道林禪師はたとえ三歳の子どもが知っていることでも、八十歳の老翁でも実践することは難しいとお諭しになり、白樂天は己の未熟さを恥じたというのです。

子どもと保育者共々に、仏心に目覚めきちんとした基本的な生活習慣を身につけるべく、保育目標を設け、心静かに落ち着いて生活することこそ、仏教保育の眼目といえましょう。そして、



鶴見大学全体がこの精神に基づく学園なのです。

開山榎庵白純大和尚二十三回忌厳修

育英生へ辞令伝達——横浜善光寺留学僧育英会

横浜善光寺留学僧育英会（黒田武志理事長）

の第十七回育英生に対する辞令伝達式が二月十日午後二時から、善光寺で挙行された。式典に先立ち善光寺開山榎庵白純大和尚の二十三回忌が厳修され、「仏教を通して世界平和に貢献したい」との願いで新寺建立を果たし、育英事業を継続している黒田理事長（善光寺住職）の師父・白純大和尚の遺徳を偲んだ。

同育英会は、黒田理事長が善光寺開創十五周年を記念し、「仏教興隆による世界平和を実現す

る人材づくり」を願って昭和五十九年一月にスタートさせた。これまでに延べ百二人にのぼる育英生を採用し、育英生の国籍や派遣先など関係国は世界二十カ国・一地域に及んでいる。

十七回目の今年は、立正大学法華経文化研究所で「大乘仏教の菩薩思想と上座部仏教の比較」について研究しているスリランカのエルワポラ・ニヤナラタナ氏（五十四歳）、愛知学院大学大学院の博士課程で学んでいるインドネシアのスダング・タント氏（僧名・スグノ、三十歳）、花園

大学院修士課程で臨済の禅思想を研究中の台湾人女性、鄭貴霞氏（六十七歳）の三人が採用された。（応募論文の要旨は後頁）

開山忌が埼玉県・能仁寺住職萩野映明老師の導師により出班焼香で営まれたのに引き続き、育英生の辞令伝達式が執り行われ、育英会理事の宮本延雄先生（鶴見大学事務局長）が選定経過を報告し、育英生三人の経歴等を紹介。黒田理事長の導師で読経の後、黒田理事長から育英生一人一人に辞令が伝達された。

この後、育英会理事の東隆眞先生（駒沢女子大学学長）と善光寺総代の中村治雄氏（防衛医科大学名誉教授）が白純大和尚を偲び、育英生への激励を込めて挨拶。東理事は、大本山總持寺に安居し首座寮の弁事だったころ、副監院の白純大和尚にかわいがってもらったことや、白純大和尚が四力寺を開山し、十数人の後継者を生み、二十数人の宗侶を育成したことなど話し、

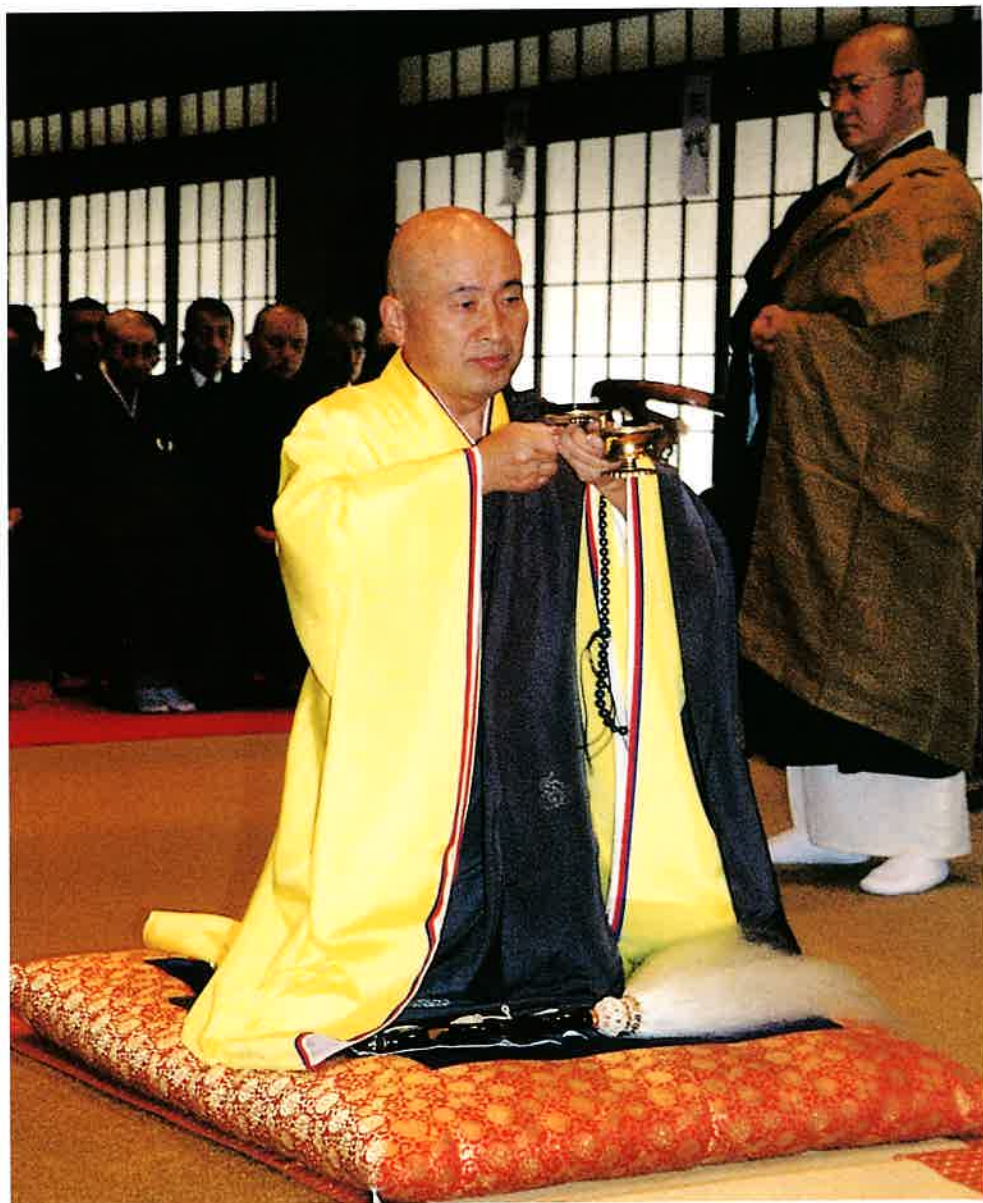
「日本の寺院仏教におけるこの偉業をどう評価すればいいのか」と道業を仰いだ。

また中村総代は、育英生に「皆さんは育英会のサポートを土台として発展していただきたい」と期待を述べるとともに白純大和尚を診察した折りに、嗣子を案じて「武志をよろしく」と病床で合掌した姿を思い出として話し、白純大和尚が師父として黒田理事長に深い愛情をかけていたことを披露した。

最後に本寺・光真寺（栃木県）の黒田俊雄住職は、全日本仏教会の事務総長として新宗教教団にも理解を示した白純大和尚の懐の深さを偲び、「念ずれば花開く」という言葉がある。一人でも多くの方が平和への祈りをもって、育英会をご支援くださるようお願いする」と述べ、謝辞とした。

善光寺開山 棟庵白純大和尚二十三回忌

平成13年2月10日



導師 萩野映明老師

香 語

善光寺開山楳庵白純大和尚二十三回忌

梅花的隆彩山門難晦真龍插草恩

香飯珍羞酬法澤芳蹤茲及影猶存

恭惟相值當寺開山楳庵白純大和尚

二十三回忌之辰

行持常潔身心夙敦崇敬先祖慈育兒孫

機鋒競及峭峻禪林繁茂

禪客如削玉堆胸懷春溫

曾歷任大本山總持寺副監院曹洞宗審事院長

全日本佛教會事務總長等要職恋旧恩

寒梅籬落春能早野雪櫺窗夜不昏

斯日屈請四來尊宿

令山僧隆一隆 以伸供養

更併修善光寺海外留學僧派遣第十七回育英生

辭令交付式報恩謝德徹本源

即今忝供底消息何以報恩

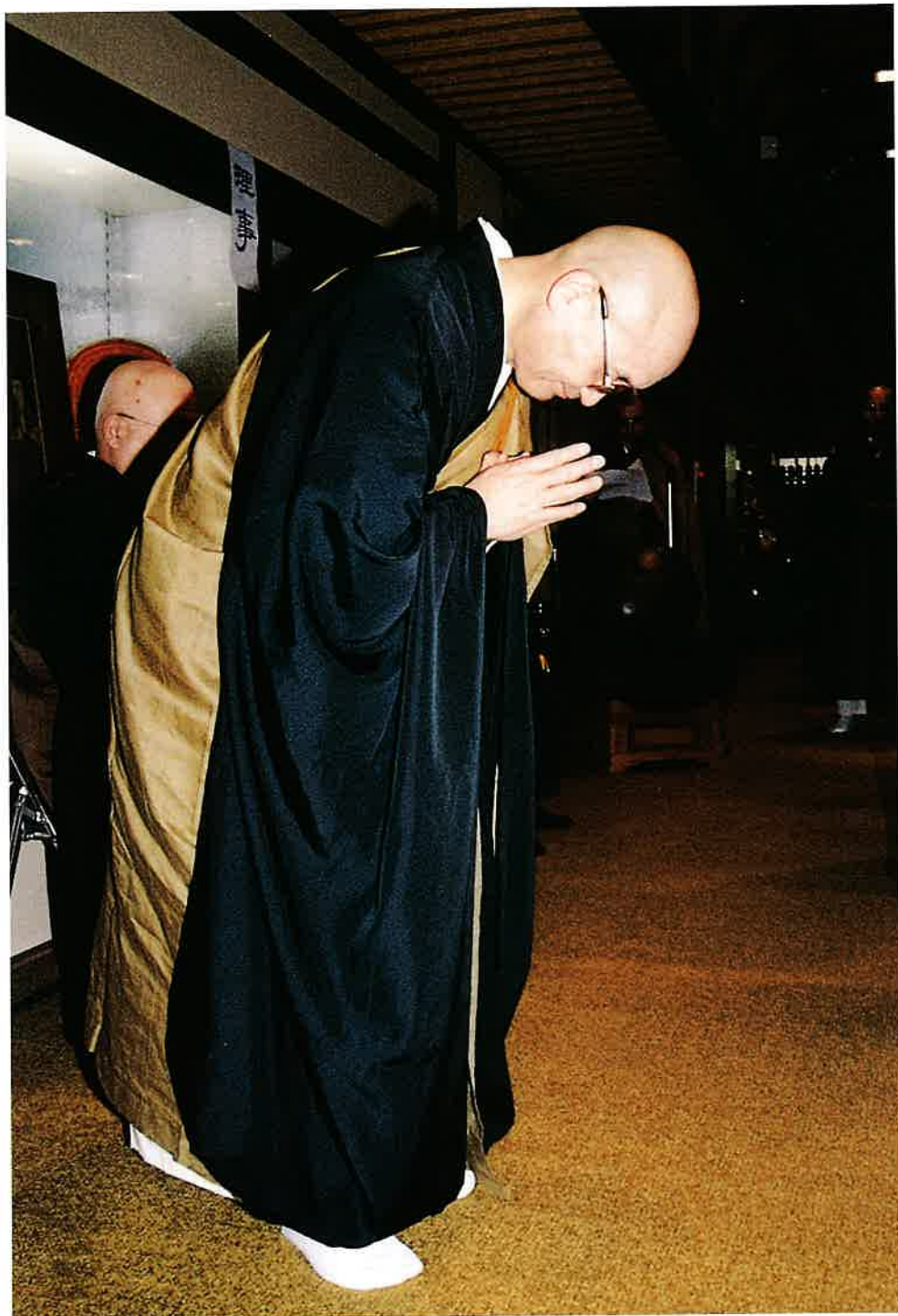
隆

鶯待晴光來柳柏

蝶隨春色到花園

能仁寺 三十一世 映明





深々と合掌低頭する善光寺黒田武志住職



光真寺三十六世中興棟庵白純大和尚（頂相）



光真寺三十六世中興棟庵白純大和尚（頂相）

敬讚 成壽山善光寺開山煤庵白純大和尚頂相

成壽山善光寺開山煤庵白純大和尚の頂相に敬讚す

煤庵古佛 八十二年 煤庵古佛の八十二年

十餘傳法 三十示玄 十餘に法を傳へ 三十に玄を示し

四寺開創 彌昌成田 四寺を開創して 彌よ福田を昌んにす

一以貫道 願輪常圓 一以つて道を貫ぬき 願輪常に圓かなり

大絶方所 細入無間 大には方所を絶し 細には無間に入り

拖泥帶水 機智廻天 拖泥帶水して 機知は天を廻し

内外顯職 自佩實權 内外の顯職は 自ずから實權を佩ぶ

教界統領 越格老仙 教界の統領 越格の老仙たり

嘖

寒梅發成壽山門 寒梅 成壽山門に發き

芳香滿善光禪苑 芳香 善光禪苑に滿つ

維時平成十三年辛巳歲次如月吉祥日

天籟 隆眞 謹書

不思議な佛縁

佛真寺駐在開教師

池澤紫山

『煤庵白純大和尚』より

ロスの朝夕は涼しい。毎朝四時になると部屋のドアをノックしてくれる人がいる。十数棟に分かれて約百二十名の常住メンバーが暮らしているの、振鈴はこの建物まで聞こえないのである。ルームメイトに教わったヨガを数分して眠けを覚まし、身支度を整え僧伽ハウスでお茶を飲み禅堂に行く。既に数人坐っている。首座を覚心和尚の逆検単、堂頭前角老師の検単が済み対坐で一炷坐り、二炷、三炷目は独参がある。堂頭老師の独参の他、先日日本での瑞世を終え、

グラスマン徹玄和尚に次ぐ愛弟子であるマーゼル玄法和尚の代参、そしてベック浄光師とウィック獅心師のインタビュート、メンバーは各々自分の師に就いて、室内の調べや助言をして頂くのである。十年來坐っている人、メンバーになりたての人、合わせて百名もの青い眼の仏様達が、今日も黙々と坐っている。禅堂の二階にある開山堂には、高祖様太祖様のご尊像があり、正面に仏真寺ご開山煤庵白純大和尚のご尊影とお位牌、そして安谷白雲老師、昨年若くして遷

化された黒田本清和尚様のお位牌が、メンバー手作りの立派な須弥壇に安置され、毎日侍真の妙融尼がご洗面、献飯を修行してお仕えしている。

本山安居中に、『跳龍』誌に紹介された当地口スアンゼルス禅センターの記事を読み、新到であつた私は、米国にも禅を求める人々がいることに驚いたものでした。日本人にさえも容易に理解されない「禅の教え」を、どのように伝えていられるのかも興味深いことでした。しかしながら在家から宗侶となつた私は得度した信州松代の長國寺での修行時代に、チェコ人の盧山さんと一緒に生活したことも手伝つて、日本語が通じないからこそ、実は通じ合う世界があるのではないかという気持ちを、密かに心に抱いていたのでした。

本山修行に慣れてきた頃、大海副監院老師にご相談したところ、思いがけず横浜善光寺の黒



田武志老師にご紹介していただき、桐ヶ谷寺の黒田純夫老師のご慈慮をもって、開教師として赴任することが出来ました。

その間、ご縁があつて本師秋田県松庵寺渡辺昭雄の下に嗣法いたしました。本師と故黒田本清和尚様は、駒澤大学の同級生であつたのでした。また前角老師のご母堂様のご生家は、信州須坂の興国寺といい、私の実家から近く、堀侯の菩提寺という名刹でした。なんと現住職水野師と私は、かつて中野市民吹奏楽団で一緒に演奏をしていた仲でした。水野師のご令室は、松本市の広沢寺住職で駒澤大学の講師であられる、小笠原隆元老師の妹様です。小笠原老師は、昭和五十四年に当禅センター訪問の際、東西文化交流インスティテュートの図書館に、貴重な蔵書をご寄贈くださっております。なお、前角老師は、興国寺現東堂老僧のご本師、早川祖禅老師に就いて得度をなされたと承りました。

仏縁、宿業と申しますが、仏門に入つて以来私の身の回りに現れる方々が、皆古くから何かしらのご縁があることに驚くと共に、受業師吉田興山老師の言葉を改めてかみしめるのです。「私は『始めまして』というご挨拶はしない。いつでもどこでも『お久しぶりです』という。昔からのご縁であればこそである」

今私は、智源さんというUCCLAの大学院で、仏教学を専攻している居士と同室です。日本語が達者なので大助かりです。そして何と云つても、天狗になりがちな私に、時々厳しいことを言ってくれる、掛け替えのない同行の善知識です。教授の善知識は言うまでもなく、真の外護の善知識に恵まれたこのご縁を無駄にせぬように、前角老師がいつもおっしゃる「ヨッコラシヨ、ヨッコラシヨ」と正精進していくことをお誓いして、ご開山榎庵白純大和尚のご鴻恩に報いんとする決意であります。(原文のまま)

宮沢賢治を想わせる黒田先生

財団法人全日本
仏教会国際部長

鎌田良昭

『榎庵白純大和尚』より

黒田白純先生が亡くなられてから、早や二年有余が過ぎ去ろうとしている。先生の訃報を紙上で知り、愕然たる思いに自失したことを、今さらながら想起する。

満面に笑みをたたえ、慈愛深い眼ざしで接しておられた先生のお姿は、いつまでも忘れることが出来ないだろう。全日仏の事務総長という、事務総責任者として国内外の諸問題を乗り切つて来られたのも、先生の細かいお心づかいと、柔和な対応によって出来たのである。全日仏の

ように、各宗各派のトップが集る団体の仕事は、凡人には仲々運営し得るものではない。先生ならではの手腕にほかならない。

昭和三十九年十一月下旬に、印度のサールナートで、第七回世界大会（WFB）が開かれた。先生は事務責任者として、私は補佐役としてこれに参加した。会場はムラガンダクティビハラ（鹿野苑寺）の境内で、そこに巨大なテントが張られた野天会場であった。秋とはいえ、日中の陽光はかなりの厳しさがあった。南方の人

は雄弁家が多い。印度英語やセイロン英語で、滔々とやられるのには閉口する。この日も相変らずのスピーチがつづいた。先生は時々うしろをふり返り「何を言っているんです？」といわれた。先生が、終始姿勢を正し、閉目して聞いておられたお姿が目には浮ぶようだ。また、大会終了後は印度仏跡巡拝という難行があり、事務局の思わぬ出費などに、自からお気を配って聞かれ、その都度ご心配を頂いたものである。

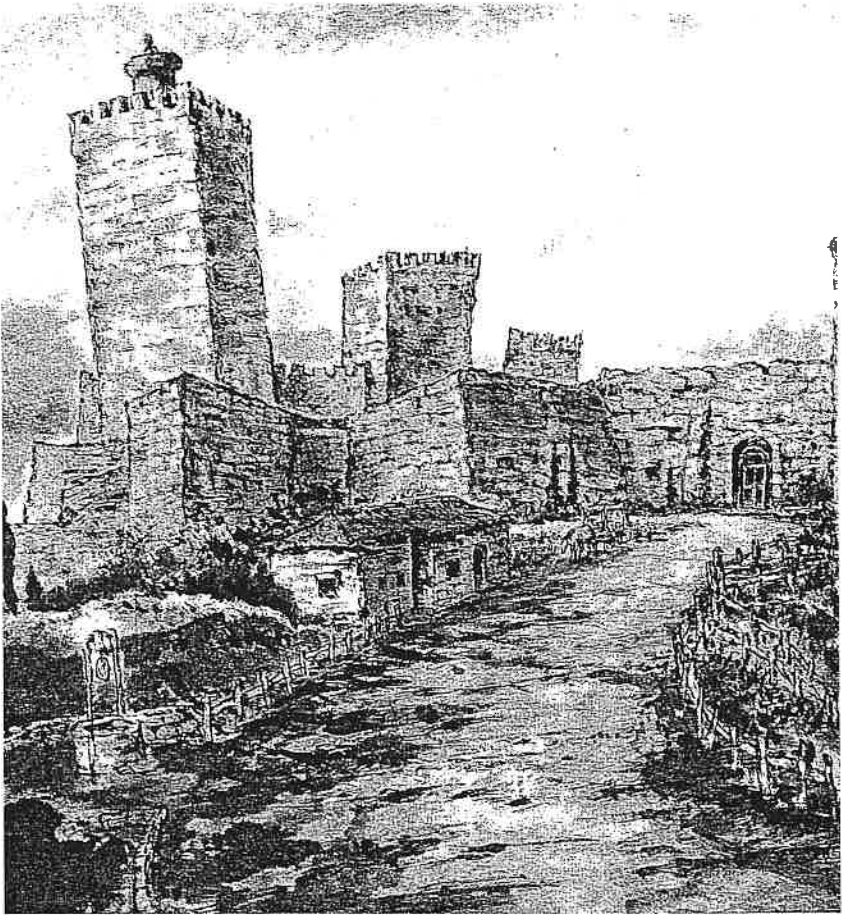
あるときは、個人的な私の祝いごとに対して、あるときは私の病気の見舞にと、ご厚志を頂戴したこともある。私の知る限りで、こんなお心配りをされた先輩は、先生をおいてはない。「決して慎ラズ……自分ヲカンジヨウニ入レズ……」

イツモニニコニコ笑ッテイル」。私は、常に先生は宮沢賢治のような方であったと思う。このような先生のご指導があったればこそ、ご令息がそれぞれ立派な禅僧になられたのであろう。

しかし、も早やあの慈愛のこもった先生のご尊顔に接することは出来ない。私は文字通り、残学菲才ながら、先生から頂戴した偉大なる精神的遺産を相続させて頂いた。こんな幸せなこととは無い。今後、自利利他のために微力ながら努力し、ご恩に報いたい気持ちで一杯である。謹んで、黒田先生のご冥福を心からご祈念申上げて擲筆する次第である。

(昭和五八年八月二八日)

(原文のまま)



「瑩山禪師の碑」黒田倫子夫人寄進

京都・清水寺の境内に

このたび京都・清水寺（北法相宗大本山、森清範貫主猊下）の境内に、曹洞宗太祖瑩山禪師にまつわる石碑が、善光寺寺族黒田倫子夫人の寄進で建つことになり、いま、その具体的な準備がすすめられている。

曹洞宗高祖と仰がれる道元禪師が出家したのは、母君のいまわのきわの遺言によるのであり、出家の決意を固めたのは、母君の仏事の際にのぼる香煙をみつめたのが、その動機であったという。しかも、道元禪師と観音さまとのむすび

つきも深く、道元禪師に一葉観音の伝説あり、宋より帰国後、京都に興聖寺というわが国最初の本格的な坐禅道場を建てたが、その寺名を観音導利院（ふつう興聖寺という）と命名しており、その代表的著作『正法眼蔵』九五巻には、「観音」の巻があり、いま、永平寺の法堂には観音さまが御本尊として奉安してある。

高祖道元禪師とならんで太祖瑩山禪師も、母君、祖母君の観音信仰、とくに京都、清水の観音さまにまつわる観音信仰が深い。

道元禪師は京都のご出身であり、瑩山禪師は越前のご出身である。ともに関西文化圏であり、京都や奈良、比叡山、高野山の仏教信仰の決定的な背景のもとにある。もとより道元禪師が、京都の清水の観音さまをご存知ないわけではなく、お参りされていないわけではない。それは、瑩山禪師においても同様である。

実に不思議なことだが、清水寺のご本堂におもむく轟門には江戸時代の高僧、曹洞宗中興の祖・月舟宗胡禪師（金沢市・大乘寺中興二二六世）の「普門閣」の扁額がかかっている。また、昭和五十八年、涅槃会の二月十五日、百九歳で遷化された清水寺貫主・大西良慶和上の乗炬は、清水寺のご要請によって、わが曹洞宗大本山永平寺七十六世秦慧玉禪師がおつとめになった。このような尊といご縁のある清水寺に、とくにお願いを申しあげて、とりわけむすびつきの深い瑩山禪師にかかわる建碑が実現することと

なった。稀代の勝躑というべきである。その文面は、左のとおりである。平成十三年中には、その優雅な碑がすがたをあらわすことだろう。場所は、仁王門を正面にして右側に十一層石塔があるが、その石塔の下で、あたりの景観もまことにすぐれている。

曹洞宗太祖瑩山禪師と清水の観音さまとの深いえにしを報恩顕彰する碑

曹洞宗太祖常済大師瑩山禪師そうどうしゅうたいそじょうさいだいしけいざんぜんじ（正中二年・西暦一三二五年示寂）は、鎌倉時代の末、越前（福井県）に降誕された祖師である。大師の自らの記するところによれば、大師は、幼少のころ、御祖母の明智みちさまに育てられた。明智さまは、曹洞宗高祖承陽大師道元禪師こうそじょうやうだいしどうげんぜんじに聞法し参禅された。

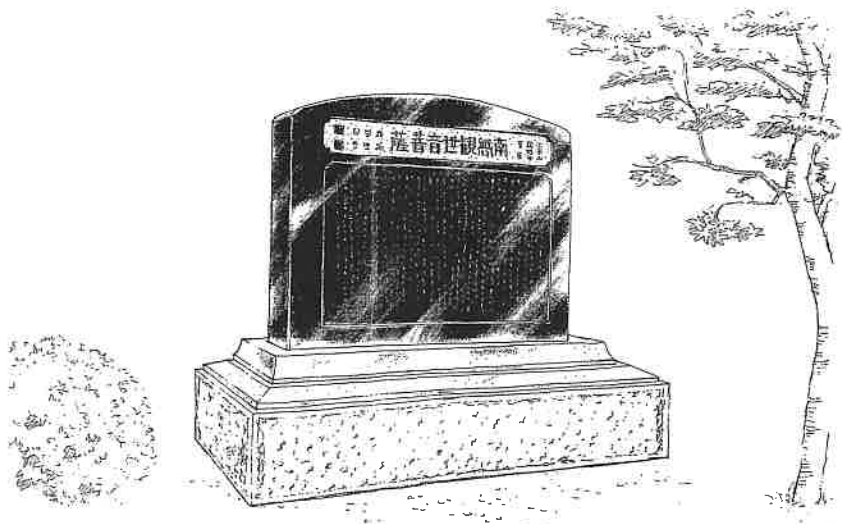
明智さまは、そのむかし、七、八年間にわ

敬興板

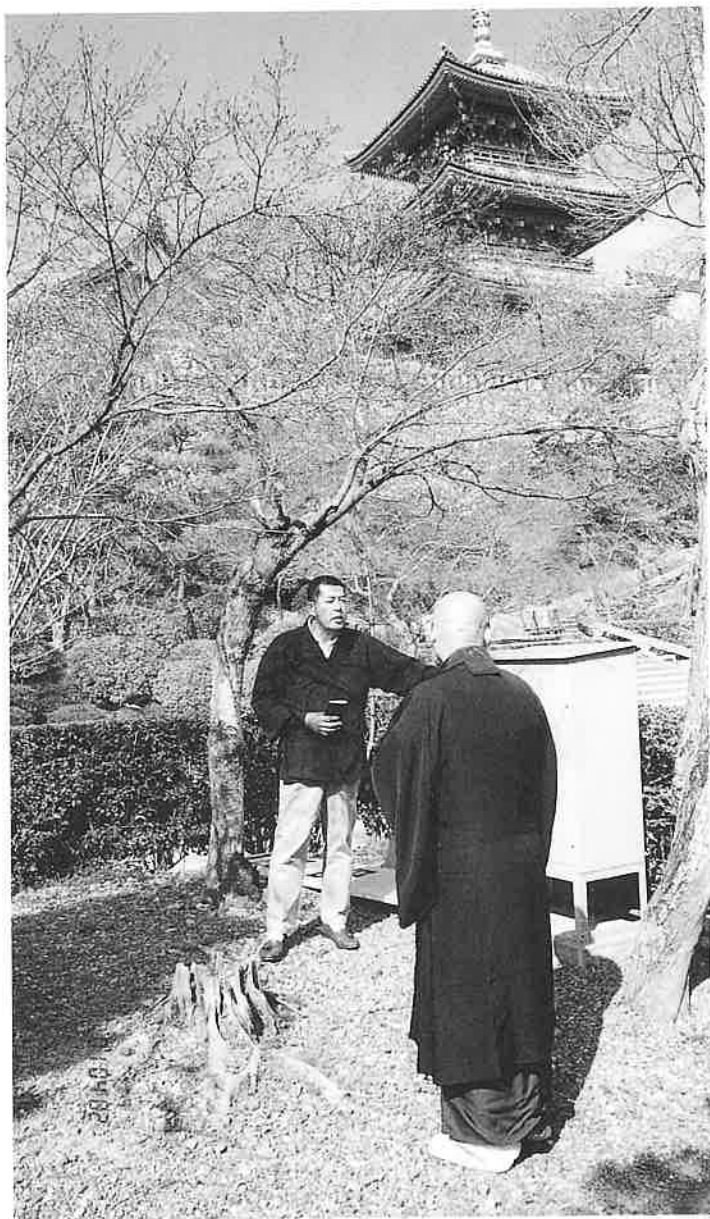
書宗橋

薩菩音世觀無南

貫總大
持本
首寺山



現場を説明する大西真興執事長



たつて、肉親の前から姿を消したことがあつたが、のちに大師の母君となる懐観えかんさまは、その消息をさがし求めて、清水きよみづの観音さまに日参し、明日は満願という六日めに、路上に小さな十一面観音さまの頭部を見つけ、これ拾いあげて、もし母の様子がわかれば、この観音像を補修したいと祈つたところ、願いは叶えられて、母君の明智さまと再会するこゝとが出来た。爾来、御祖母、御生母の深い観音仰に育まれて成長した大師は、能登（石川県）に洞谷山永光寺を開いて、かの十一面観音さまを奉安する円通院を建て、永光寺を女人に仏法のご利益がゆきわたる祈りの道場とし、また諸嶽山總持寺を開くにあたり、門

に入つて諸堂棟を廻顧すれば、清水寺のごとく、壯観であり、ここは仏法の縁が熟した霊場であると瑞夢を感じた。果して、仏祖正伝の法は、大師とその門流に至つて、飛躍的、爆発的に伸展したのである。

ここに、越前に生を受けた篤信の人、神奈川県横浜市成壽山善光寺の黒田倫子夫人は、発願して、資を投じ、大本山清水寺の御理解と大本山總持寺の御庇護のもと、常済大師、御生母懐観大師、御祖母明智優婆夷三代と清水の観音さまとの深い仏縁を顕彰し、永くその恩徳を讃える碑を建立するものである

（末孫 文学博士 東 隆眞撰）
平成一三年吉月吉祥日

現代中国の観音信仰

—— 仏教と民俗宗教の媒体としての観音菩薩 ——

駒澤大学名誉教授 佐々木 宏 幹

一 はじめに

この二十二、三年のあいだ、私は東南アジアの華人社会（中国本土を離れ、他国に定住するにいたった中国人の集団）において、民俗宗教（精霊や呪力を信仰するような原始的な信仰形態が仏教や儒教のような教典・教理宗教の影響を受けて形成された混交的な宗教形態であり、主に民衆とか庶民と呼ばれる一般生活者によって信奉される）がどのような現状にあるか、さ

らにそれが仏教（寺院と僧侶）とどのように関わっているかについて、調査を重ねてきた。

民俗宗教は英語でフォーク・レリジョン (Folk religion) と呼ばれるが、フォーク (Folk) は「人びと・世人」という意味と「古くからの習慣や信仰などを継承する人びと」という意味をもつ。だから民俗宗教は、庶民信仰とか土着宗教としばしば同一視され、教典・教理宗教の立場からは、迷信的で呪術的かつかがわしい宗教と見られることが多かった。

ところが民俗宗教の実態を調査研究してみると、それが決して仏教のような教典・教理宗教と対立する宗教形態ではないことが見えてきた。対立するどころか民俗宗教は現実には教団（集団）化された仏教の「生きた姿そのもの」であり、さらに言えば「民俗仏教」として実質的に教典・教理仏教を支えていることがはっきりしてきたのである。

一例を挙げよう。私は先に民俗宗教は「精霊や呪力を信仰するような原始的な信仰形態……」であると述べたが、一体アジア仏教文化圏において仏教僧侶が精霊（死霊や祖霊）や呪力（行力や祈祷力）とまったく関わらないところがあるろうか。わが国は「葬式仏教」の国と言われるが、この形態は正に教典・教理仏教と民俗宗教との見事な連携であり複合ではないのか。このように仏教が「生きている場面」では、仏教と民俗宗教とは「習合・複合」しているのが自明

なのに、どうして学問的には両者を対立的としか捉えないのであろうか。端的に言えば、これまでの仏教研究は文献学中心の教典・教理の研究に極端に傾斜し、人間や社会の現実に生きる仏教、つまり民俗仏教を等閑視してきたからである。テクスト重視のあまりコンテクストが軽視されてきたからである。

今後の仏教研究は、テクスト（教典）とコンテクスト（社会）の両者を視座に収めないと十分な成果を挙げ得ないのではあるまいか。以下では中国（華）人社会において、仏教（ここでは教典・教理を志向する僧侶とその活動の場である寺院）と民俗宗教（ここでは精霊や呪力を求める一般民衆および精霊や呪力に専ら関わる巷間の霊能者）とを媒介する重要な媒体としての観音（信仰）を取りあげ、仏教と民俗宗教間のダイナミズムについて述べたい。

二 シンガポールの生き仏

シンガポールは華人の国（総人口の七五％が華人）であり、東南アジアで最も近代化されたハイテク社会である。教育程度が高く、中年以下の世代は華語に加えて英語とマレー語に通じている。

宗教はどうであろうか。「シンガポールの仏教」という論文をものしたV・ウィーは当地の仏教を「教典仏教」と「仏教的要素を含むシンクレティック（重層的）な中国宗教」および「仏教的要素を含まないシンクレティックな中国宗教」の三つに区分している。

少し解説を加えると、「教典仏教」とは伝統的な仏教を忠実に実践し、非仏教的と考えられるいかなる儀礼の執行も頑なに拒んでいる僧侶の仏教で、その数は少数、次に「仏教的要素を含む中国宗教」とは教典の教えにも従うが民俗的

儀礼・慣行にも参与する僧侶と信者の仏教で、その数は最も多い。第三の「非仏教的な中国宗教」は道教的な霊能者中心の民間宗教で、やはり数が多い。これをわが国の仏教現象に比定すると、概して「専門僧堂の仏教」、「一般寺院の仏教」および「民間信仰」となるうか。

V・ウィーの分析は大変示唆的であるが、問題がない訳ではない。ウィーは「非仏教的な中国宗教」の廟は、霊能者（霊媒）の施設であると断じているが、私の調査では霊能者のなかにも仏教と関わり、俗人を仏教に架橋している人物が少なくないからである。

シンガポールのレース・コース・ロードにある「南海観音仏祖」は女性霊能者の主権する廟として有名である。この観音仏祖の像は先代の女性霊能者が、中国浙江省の観音霊場普陀山から勧請したものである。この廟の霊能者（現地ではタンキー〈童乩〉と呼ばれる）は人びとが



南海観音仏祖の化身（シンガポール）



聖観音の化身（シンガポール）

ら「生き仏」と称される。毎日、午前と午後
に数時間儀礼を行なうが、その際に、観音の仏格
が彼女に憑依し、彼女は観音に化して人びとの
悩みや苦しみに対応する。主な役割は宗教的カ
ウンセリングであり、さまざまな人生問題に示
唆を与えるとともに、人びとの求めに応じて靈
驗あらたかな護符を作り与える。

注目すべきは、彼女が依頼者や信者たちにな
いして、真に人生苦を解決するためには観音を
祀っている仏教寺院に行き、僧侶の指導を受け
るように勧めている点である。

アッパー・トムソン・ロードに位置する楊天
宮も女性霊能者の廟として知られる。ここでは
祭壇に感天上帝、千手観音と十八羅漢を祀って
いる。彼女は感天上帝または観音の化身として
振る舞うが、とくに病気をめぐっての判断と指
導で名をなしている。千手観音生誕日とされる
日には、仏教寺院から僧侶を招いて『観音経』

を読誦してもらおう。

このように霊能者の宗教であるからと言って、
すべてが非仏教的であるとは言いがたいのである。
大きな枠で見ると、彼らは民衆を仏教に関係
づける動機（媒介）の役割を果たしているとい
うことになる。

三 中国本土の仏教と民俗宗教

シンガポールでもマレーシアやフィリピンで
も、華人社会の宗教は、寺を中心とする仏教と
廟をめぐる民俗宗教の大別して二つの領域から
成っている。そして仏教と民俗宗教は対立して
いるのではなく、相互に影響し合いながら民衆
のニーズに応えていた。仏教僧侶と民俗的霊能
者を二つの領域に区分するのは正しい。宗教的
伝統を異にしているからである。しかしこの「区
分」を固定化すると、「生きた宗教としての仏教」
は見えてこない。

寺と靈能者の廟は異なる。しかし民衆はその両者を必要とし両者に関わるから、両者の関係はスタティックではなく、つねにダイナミックである。そして異なる両者を繋ぐのにあづかつて力ある役割をもっているのが観音（信仰）である。

東南アジア各地に移住した華人の多くは、中国本土は福建省の厦門アモイから出港していたことを突きとめた私は、まず民俗宗教の調査を厦門から始めた。東南アジアの華人社会の靈能者はどこでも童乩タンギと呼ばれているが、厦門とその近隣地域でも童乩の語が使われていた。私は今のところ、童乩のルーツは多分福建省の厦門を中心とする地域ではないかと推定している。他地域ではこの語は使われていない観があるからである。

厦門とその周辺には、数多くの女性童乩が存在する。彼らの守護神（仏）はさまざまな観音

である。聖観音、千手観音、南海観音、紅面観音、白衣観音等々。調べてみると靈能者の多くは、観音像を厦門の大刹南普陀寺（観音靈場で有名）か前記浙江省の普陀山普濟寺で求め、僧侶に開光・開眼してもらってから、自宅の祭壇に安置していた。

彼らはここでも観音の化身として人びとの願いに応じていた。彼らは時を定めて信者たちを引率し、普陀山や九華山（地藏信仰で有名）を訪ね、僧侶に依頼して死者の救済を目的とする超度や餓口、水陸会などの儀礼を修行してもらう。多額の布施が必要であるという。ここには、靈能者が依頼者の不幸や災厄の原因が死者の冥界における苦しみにあることを知りえたとしても、死者を苦界から救済するには有名寺院の僧侶に依頼するしかないとの論理がある。地位的には、仏教僧侶優位、靈能者劣位の構造は明白である。



南海観音の化身（中国・廈門）



高さ33メートルの南海観音（浙江省・普陀山）

僧侶に靈能者との関係について尋ねると、きまって答えは「われわれは彼らのごとき迷信の徒（草頭神）」とは何の関係もない」である。しかし実際には、靈能者が購入した観音像に力を封入（開光）したのは僧侶であり、この観音の力を信じた人びとを寺に誘い僧侶に儀礼を行なってもらうのは、靈能者とこれを信じる人びとである。観音像は僧侶の開光・開眼により「力ある仏」となり、この力ある仏に観音が人びとを寺に導き、布施としての金銭が寺を支える資となっている。南普陀寺では附属の閩南仏学院において百余名の学僧が「教典仏教」を学んでいる。これが可能なのは御利益を求めて観音妙智に縋りつく民衆がいるからであり、この民衆の信仰を活性化させる靈能者がいるからである。仏教と民俗宗教は、ここでも観音（信仰）を介して相互補完関係にあると言えよう。

四 観音の力

中国では一九六六年から七六年頃にいたる、いわゆる文化大革命期にあって、紅衛兵の活動が全国的に激化した。彼らは「破四旧」（旧思想・旧風俗・旧習慣・旧文化）のスローガンの下に伝統文化の破壊を実行した。このため、寺の仏像や經典は破壊または焼却された。しかしこの時期においても、各種靈能者の活動は秘に続けられていたという。

一九七九年、改革開放運動が始まると、仏教も民俗宗教も急激に息を吹き返した。とくに村々に人びとに守られながら潜在し続けた靈能者の復活が早かった。そして彼らが祀った守護神（仏）のなかでとりわけ多かったのが観音菩薩であったという。

どうして人びとは、あまたの仏菩薩のうち観音をことさらに信仰するにいたったのであろう

か。観音（信仰）はとくに大乘仏教の地である東アジア（中国、朝鮮、日本）において盛行した。それは、大乘仏教の教えが仏陀の智慧に加えて慈悲つまり一切衆生の「救い」を強調するにいたったからであると言えよう。

観音はサンスクリット語では「アヴァローキテーシュヴァラ」(Avalokitesvara)と呼ばれ、「アヴァローキタ」(観る)と「イーシュヴァラ」(自在に)の合成語であり、「観自在」と漢訳された。また中央アジアで発見された『法華経』では「アヴァローキタスヴァラ」(Avalokitasvara)と記されており、「スヴァラ」(音・音声・声)が接尾語となっているから「観世音」と訳された。観音は「観自在」と「観世音」の略語である。

いずれにせよこの菩薩は、世間（社会）の苦しみの声（音）を鋭く「観」ぬき、「自在」に力を駆使して人びとを救い出すという性格をもつ



普陀山の仏像店（浙江省・普陀山）

とされる。

また観音は諸菩薩のなかで唯一、救いを求める人びとの願いに応じて、その姿形を自在に変化させるといふ性格をもつ。さらに観音は東アジア地域では母性的特徴をもつ菩薩と見られるにいたり、母の慈愛の象徴と受けとられることとなる。

このように、観音が具える「救済性」「変化性」および「慈母性」は、大乘仏教の説く「自未得度先度他」の思想の具体的な表現として民衆から強く信奉される対象となった。

とすれば、観音菩薩こそは仏教と民俗宗教という理念的に相異なる宗教形態を变幻自在な営みで連携・習合させ、もって民衆の救いを実現させるのに、最適の仏であると言えまいか。

佐々木 宏幹（ささき こうかん）

一九三〇年 宮城県に生まれる。駒澤大学文学部を経て東京都立大学大学院博士課程修了。

専攻 文化人類学・宗教学人類学。文学博士。

現在、駒澤大学名誉教授。日本宗教学会常務理事。国際宗教学研究理事。

著書に『宗教学人類学』（講談社）、『聖と呪力の人類学』（講談社）『仏と霊の人類学』（春秋社）『神と仏と日本人』（吉川弘文館）『シャーマニズムの人類学』（弘文堂）ほか。



くらしの中で読む『正法眼蔵』

―面授の巻― その七

成興寺住職 小倉玄照

〈本文〉

屋裏おくりに正伝せいでんしいはく、八塔を礼拝するものは、
罪障ざいしょう解脱げだつし、道果どうか感得かんとくす。これ釈迦牟尼しやくか牟尼の道どう
現成げんじょう処じょを、生処せいじょに建立たてまつし、転法輪てんぽうりん処じょに建立たてまつし、
成道じょうどう処じょに建立たてまつし、涅槃ねはん処じょに建立たてまつし、曲女城きよくにょじょう辺へん
にのこり、菴羅衛林あんらえりんにのこれる、大地だいちを成じやうじ大だい
空くうを成じやうぜり。乃至乃至、声香味触法しやうかいしよくしよく色しき処じょ等に塔とう成じやう
せるを礼拝するによりて、道果どうか現成げんじょうす。この八
塔を礼拝するを、西天竺さいてんじく国のあまねき勤修ごんしゆとし
て、在家出家・天衆人衆てんじゆじんじゆ、きほうて礼拝供養らいはいくうやうす
るなり。これすなはち一卷の經典なり。

仏經はかくのごとし。いはんやまた、三十七
品の法ほんを修行しやうぎやうして、道果どうかを箇箇しやうじやう生せい生せいに成就じやうじゆする
は、釈迦牟尼しやくか牟尼の瓦古瓦かんこかんこん今の修行修治しやうぎやうしやうぢの蹤跡しやうせきを、
処じょの古路ころに流布りゆうふせしめて、古今ここんに歴然れきぜんせるが
ゆゑに成道じやうどうす。

しるべし、かの八塔の層層しやうじやうなる、霜華しやうかいくば
くかあらたまる。風雨ふううしばしばをかさんとすれ
ど、空くうにあとせり、色しきにあとせる、その功德ごんてきを、
いまの人にをしまざること減少げんじゆせず。かの根・
力・覚・道ごんりきかくだう、いま修行しやうぎやうせんとするに、煩惱ぼんごあり、
惑障ごくじやうありといへども、修証しゆじやうするに、そのちから

なほいまあらたなり。

釈迦牟尼仏の功德、それかくのごとし。いはんやいまの面授は、かれらに比準すべからず。かの三十七品菩提分法は、かの仏面・仏心・仏身・仏道・仏光・仏舌等を根元とせり。かの八塔の功德聚、また仏面等を本基とせり。いま学仏法の漢として、透脱とうだつの活路かつろに行履あんりせんに、閑静けんじょうの昼夜、つらつら思量功夫すべし、勸喜隨喜すべきなり。

〈現代語私訳〉

わが仏門には、八大靈塔を礼拝する者は、罪の障まわりから解かれて安心あんじんし、仏道に生きる身のありがたさを実感することが出来ると正伝されている。これは、釈迦牟尼仏の御一代における記念すべき重要遺蹟、例えば御降誕の地に建立し、初めて仏法を説いた聖蹟、いわゆる初転法輪しよてんぽうりんの地に建立し、成道じょうどうの聖地に建立し、御入滅の聖

地に建立し、或いは忉利天たうりてんからこの地に降下されたという伝説がある曲女城きよくによじょうのほとりに残り、また毘舍離城びしゃり外の釈尊説法の地として知られるマンゴー樹（菴羅衛）の林園に残っている仏跡として、大地にどつしりと建ち、大空にそびえている。視点を変えれば、釈尊の生きざまを人間が認識しやすいうように塔のかたちで示されているのを礼拝すれば、仏道修行のありがたみが出現するのである。この八塔を礼拝することをインドでは誰もがねんごろに勤めるべき修行として、在家も出家も、天人も人間も、競って礼拝供養するのである。この八塔はつまるところ一卷の経典にほかならないのである。

経典とはこのようなものである。ましてや釈尊の説かれる修行方法を集成すれば三十七種類になると言われるが、それらを修行してその成果を一人一人がその生きざまの上に示すことができるのは、釈迦牟尼仏が生涯かけて修行され

たあとかたをあちこちに残し、それを人々に広く知らしめて、今に至るまではつきりとさせておられるからであって、そこにこそ仏道が生きているのである。

承知しておくがよい。かの八塔がそれぞれに層々として高くそびえ立ち、幾歲月が経過したのであろうか。風雨がしばしば浸食しようとしたが、伝承によって空にイメージとして残り、遺跡としてかたちを残し、その功德を現代の人々にもおしむことなく当時のままに及ぼしている。三十七種の修行方法を今の時代に実践しようとするれば、たとえ煩惱があり、惑いや障りがあったとしても、釈尊の生き方を慕い求める限りその尊さ^{うんぎ}ありがたさを新鮮な感動でもって我が身心で肯う^{うけ}ことが出来る。

釈迦牟尼仏の功德のありがたさは、まさにこのような次第である。まして、この巻のテーマとして問題にしている面授は、今あげた八塔礼

拝等の功德とは比較すべくもなく尊い。例の三十七種の修行方法にしても仏面・仏心・仏身・仏道・仏光・仏舌等を基本としたものである。

さき^{さき}にあげた八塔の功德のもろもろもまた釈尊の面等^{めんとう}を拝むことが基本となっている。いま仏法を学ぶ者としては、世俗的発想から脱して、自然の摂理に添いきって日常を生きるには、大自然の静寂の中で昼も夜も、よくよく釈尊の御一代について思いを巡らし工夫^{くふう}しなければならぬ、大いなる喜びをもってその御一代の生き方を慕い求めねばならぬ。

散骨なんてとんでもない

大都會の生活に倦んで、定年を迎えたのを潮時に過疎の田舎に移住して来る人が結構あるようです。私の住んでいる町からは自動車で一時間ばかりを要するM町の空き家に都會から老妻



と共に移住して農耕を楽しみながら年金生活を送っているAさんもそんな一人です。

ある時、ふとした縁から、仏壇への回向を頼まれて私はAさん宅へお伺いしました。

「こちらへ移ってから長い間、ご先祖様にお経をあげておりませんでした。気になっていました。どうぞよろしく御供養下さい。」

私は老夫婦と一緒に仏壇に祭られた先祖の御位牌に香華灯燭を供え、読経しました。Aさん夫婦は、大層喜んで、奥様手づくりの精進料理で接待をしてくれました。

会食をしながらAさんは、異なことを語りだしました。

「この頃、私たちも死後のことが気になり始めました。葬式をどういうかたちでしたものか、と家内とよく語りあうのです。」

Aさんが言うには、田舎で生活していて、村人たちとは、親しく交流させていただいている

から、町内会の一員とはなっていないけれど、

お葬式があれば、香料をお供えし、見立てをしている。しかし、自分の時には、村の人に迷惑をかけたくないから、隣りのT市にある葬儀用の会館で子供と孫だけに立ち会って貰ってしめやかに葬儀をして貰いたいと思っている。その時は、ぜひ貴僧に引導を渡して貰いたい――

Aさんは、さらに「子どもたちには、私の遺体は、火葬に付した後、どこかの山中か海上にひそかに散骨して貰うよう頼んでおきたいと思っている」と言われます。

いわゆる「進歩的知識人」の発想。それにしても「葬式は子や孫に列席してきちんと貰いたい」ということと、「遺体は後腐れがないように散骨して貰いたい」ということとは、相当に矛盾しています。

「無常の世の中ですから、個体は必ず死にます。しかし、いのちは永遠なのです。あなたの

いのちは、御両親から伝えられたものであり、それを御子息に伝え終つたら肉体は死を迎えます。しかし、伝えたからハイそれでおしまい、ではありません。あなたが、お仏壇にお祀りした御両親のお位牌に毎日手を合わせて拝みながら、それだけでは何だか申し訳ないような思いがずうっと気にかかつていて、今日、私をお招き下さって供養の法要をされました。そして、何だか胸につかえたものが下りたように安堵されたと思います。

御両親の御位牌を拝みつつ、ありし日の御姿を偲ぶ——そのことよって、私たちは永遠の過去に連なるいのちの根源に手を合わせていることにもなっているのです。

あなたの御葬儀はとても大切で意義あることなのです。人知れずしめやかに——というあなたの願いがわからぬでもありません。しかし、あなたが、自立して大都会で生活している御子

息と別かれて過疎の山村で生活した老後のその生きざまを御子息たちに偲んで貰うことも大切な「いのち」を伝えるための行持ぎょうじなのです。

村の人たちがあなたの死を悼み、みんな集まって紙細工で旗を作り、提灯をこしらえる。そして、大がかりな葬列を整えてあなたの棺を村境まで送ってくれる——あなたが身罷みまがつたという報せを受けてかけつけた都会住まいの御子息たちは、片田舎の大時代的なお葬式をわけもわからず夢中で勤めながら、あなたが田舎の村人たちと哀歓を共にしつつ、淋しいけれど、しみじみとした人情の中で豊かな最後の人生を過ごされたことに感動するでしょう。そこに生じる別離の涙に、あなたのいのちが正しく御子息たちに伝わったことを私は認めたと思います。

あなたの亡きあと、遺骨は、今ある御先祖の墓にきちんと納めた方がよいでしょう。お彼岸やお盆、或いは年忌の法要ごとにそこにお参り

することによって、あなたの生きざまは、あなたのいのちが伝えられた子孫の身心に永遠に生き続けるのです。葬儀や御法事を決して虚礼と考えてはいけません。」

交互に会話を交わしつつ、私は大要そんなことを話しました。Aさんは得心されました。自分の葬儀は、先祖代々の墓地がある大都會のB寺の和尚さんをお招きして過疎の田舎で村のしきたりに従って執り行つて貰うよう子息たちによく伝えておきたい。そして、遺骨は、檀那寺の先祖代々の墓地へ納め、古来のしきたりに従つて墓参り年回法要をねんごろに勤めてほしい、と頼むことにする——Aさんは、長い間、気にかかつていた自分の死後のことについてそんな風に決断されました。

墓石や位牌を拜むことの大切さ

お釈迦様の生きざまを慕い、お釈迦さまのように生きたい、と願うことが仏教徒としての生き方の基本です。お釈迦さまに面授面授したいのちを代々受け伝えて今を生きているのが仏教徒としての私ですからそれは当然な話です。

無常の世に生きながら永遠の存在であろうと願うならば、いのちの相続は必須の条件です。仏教、なかならず禅門では悟道ということを中心とします。いわゆるさとりを問題とするのですが、それはいかなれば面授面授の重要性を認識し、それが成就の可能性を臍おちすることと言つてもよいでしょう。

さとりを実現する智慧を得るための修行方法として説く「さんじゅうしつ三十七品菩提ぼだい分ぶん法ぽう」も、ことばを換えれば「面授面授」を障りなく成就するためのものであるということもできます。(ちなみに三十七品とは、四念処・四正断・四神足・五根・五力・七覚支・八正道の七科の集計三十七項目

のこと。

もちろん、この段の本文で説く八大靈塔に、対する信仰も釈尊の面授を補完するものとして受けとめよ、と道元禪師は仰せになっているようです。八塔を礼拝することによって今は亡き釈尊の御生涯を彷彿とするのです。時代の経過と共にとかくすると面授面授により伝えられたいのちの本質が風化していくのを回復させる力が八塔礼拝の行にはあるということでしょう。

私たちの家庭で仏壇に先祖の位牌を祀り、納骨した墓石に手を合わせて拝む。或いは、お寺にお参りすることも、八塔を礼拝することと本質的には同じです。幼少時から生活を共にした今は亡き父や母の墓石に手を合わせて祈ることによって、今ある私のいのちの無常性を自覚するのです。父や母と喜怒哀楽を共にしながら生活する中で、そのいのちを面授面受して今の私が存在していることを確認するのです。世俗的

にはそれを「感謝」とか「報恩」とかと表現します。

父や母の背後には、祖父や祖母があります。そのまた背後には、曾祖父や曾祖母。そしてそのいのちに連なる数知れぬご先祖があります。先祖代々の精霊です。

それらに手を合わせて礼拝しつつ、連綿として伝えられた私のいのちを子孫に伝えて行くことをも自分の義務として先祖代々の精霊に誓うのです。

また曹洞宗の仏壇には、お釈迦さまを中心に道元禪師と瑩山禪師の三尊を祭りますが、それは、今ある私どものいのちの根源を象徴していると言ってよいでしょう。面授面受して伝えるいのちの根源が三尊仏に象徴的に示されているのです。



釈迦牟尼仏正伝御袈裟普及協会 〈「中外日報」平成十三年三月十日付〉

台湾仏教界へ袈裟百肩——功德普及を願い贈る——

仏陀の教えに帰依した仏道修行者が国の違いを超えて等しく身につけ、それを着用すること
で無量の功德があるとされる袈裟百肩を、日本
の「釈迦牟尼仏正伝御袈裟普及協会」(板橋興宗
会長―曹洞宗大本山總持寺貫首)が台湾仏教界
に贈呈した。二月二十日に台北市内の普賢講堂
(淨耀住持)で挙行された贈呈式には日本から
六人の僧侶が臨み、台湾側は中国仏教会の浄心
理事長、悟明前理事長ら長老が出席した。

この袈裟百肩は山形市に本店を置く法衣・仏

具店の井筒屋(榎森誠社長)が施主となり供養
した。榎森社長は「最第一清浄の衣財は糞掃衣
である」との信念から、釈迦牟尼仏正伝の袈裟
の功德を世界に普及することを発願し、横浜市
の曹洞宗善光寺・黒田武志住職の全面的な協力
を得て、超宗派の「釈迦牟尼仏正伝御袈裟普及
協会」を組織。その第一回として台湾への袈裟
贈呈を具体化した。

台湾での贈呈式には、日本から「正伝御袈裟
普及協会」会長である板橋貫首の代理として阿

部寛志總持寺副監院、臨濟宗大龍寺住職の松田紹典聖和女子短期大学理事長兼学長、善光寺の黒田住職、東隆眞駒沢女子大学学長、天台宗龍山寺の下村聖和住職、曹洞宗法恩寺の加藤昌史住職、井筒屋の榎森社長ほか関係者ら十二人が出席した。

贈呈式の会場となった普賢講堂は台北の中心街にあり、台湾の初代仏教青年会理事長で青少年の更生保護や教誨など幅広い社会活動により知られる浄耀法師が住持する寺。贈呈式は多数の信者が奉仕して準備・運営され、中国仏教会の浄心理事長、前理事長で名誉理事長の悟明長老、書家として知られる廣元長老(浄律寺住持)、国民党中央組織発展委員会の趙守博主任委員、立法院の潘維綱委員、華梵大学の馬遜校長ら仏教界内外の要人が参列した。

日本側が阿部副監院の導師で読経したのに続いて台湾の僧侶が読経し、それぞれが献灯。中

華仏教音楽協会のメンバーによる合唱、来賓紹介の後、浄耀住持が「お釈迦様のお袈裟を普及するため、この式典が開かれた。私たちは生まれ地域により、さまざまな違いがある。しかし仏教の教えとお袈裟の因縁を通して心を交流させ、違いを融合することができる。お袈裟も仏教の教えの一つであり、出家者の象徴である。

お袈裟を通して両国の仏教交流を深め、仏の教えを弘めていくことを願う」と歓迎の辞を述べた。

日本側の僧侶を代表して黒田住職が浄耀住持に袈裟を贈呈。黒田住職は「二十一世紀を迎えながら世の中は難しい問題が多い。お袈裟を贈呈する御縁を得たことを機に、お釈迦様のお徳を頂戴し、日本と台湾が力を合わせて世界平和と仏法興隆のために共に祈念したい」と挨拶した。これに対し浄耀住持から「正伝御袈裟普及協会」の板橋会長への感謝金杯が阿部副監院に手渡された。

台湾側を代表して、悟明長老は「本日の式典は台湾の仏教にとつて光栄だ。中日は兄弟の国である。私の記憶の中には台湾と日本との交流の歴史がたくさんある。その中でも本日のお袈裟の贈呈は素晴らしい因縁だ。二十一世紀は仏教の世紀であり、中国、日本、韓国をはじめ世界中で同じお釈迦様を教主として仏教を信奉している。この式典を機に互いの交流をさらに深め、世界に仏教を弘めてほしい」と挨拶。

浄心理事長は「正伝御袈裟普及協会は各宗派の連合体である。これは日本仏教においては宗派を超えるものだ。日本と中国のお袈裟は少し違う。しかし今回、普及協会の皆さまは台湾の仏教のためにお袈裟を作ってくださった。そのお心遣いに心から感謝する。今後とも、この会を通じて日本と親善交流を進めてゆきたい」と感謝の辞を述べた。

「両国の仏教一家のよう」

また廣元長老は「日本と中国は同文同種だ。日本仏教は中国から韓国を通じて伝わり、共に同じ仏教を信奉している。同様にしてお袈裟も伝わった。本日はこのお袈裟が日本から台湾へ伝わってきた。これは中日両国の仏教が一家のよつて同じであることを意味している。これによつて仏教はもつともつと広まっていこう」と意義を称えた。

この後、東学長が袈裟の根本精神とその功德について講演した。

ご挨拶

お袈裟は、仏教徒の衣服であります。

およそ二五〇〇年まえ、仏教の開祖釈迦牟尼

仏は、出家の修行者にお袈裟を着用するように指示されました。

爾来、仏教はお袈裟とともにインドから世界各地に伝播しました。アメリカ、ヨーロッパなど、各地に多様な展開をとげて今日に至っております。仏教が広まるどころ、必ずお袈裟が伝わりました。

お袈裟は、単に仏教徒の衣服だけではなく、釈迦牟尼仏の教えに帰依し、学び、身につけ、人びとに伝えることをあらわし、さらに出家僧だけでなく在家の信者も、これを着用するようになりました。お袈裟は、釈迦牟尼仏のおからであり、おこころであるというところまで尊崇の念がすすめられました。お袈裟を着用することは無量の功德があるとされております。

そのお袈裟の素材、色、大きさ、作り方、とりあつかい、種類など、年代や地域のちがいはあるにせよ、その根本精神や様式においては、

ほとんど一致共通していると言ってよいのであります。

お袈裟の一致共通している要点をまとめてみますと、次の三点に整理されるでしょう。

一は、お袈裟は、人間の執着の対象とならない路傍に捨てられた布を拾い、洗い、使える部分をはぎあわせた素材を原則とします。この素材でつくったお袈裟を糞掃衣ふんそうえといいます。これをもっとも清浄なものといえます。

また、この糞掃衣は、したがって原色というか純色を避けて執着心を離れ、濁った色すなわち雑色もしくは染めたものを用いるのであります。

二は、お袈裟は却刺せきの縫い方で作られます。一度縫ったところは少し後に返って縫いすめていく方法であります。ミシンなどの機械による縫製ではできないのであります。このことによつ

てお袈裟は縫い目がしっかりして丈夫であるから連続して縫い糸がほころびることがなく、しかも表の縫い目を美しく仕上げるのであります。

三は、お袈裟の功德です。お袈裟を福田衣ふくでんねともいいますが、それはお袈裟の縦の条は五条、七条、九条、十一条、十三条、二十五条など奇数になっていますが、これは田の畔をかたどっているのであります。田は、われわれのもっとも重要な食べ物であるお米をつくるように、お袈裟を着用することによって、お袈裟は最高のこの世の福田となり、この世に幸福をもたらすのであります。お袈裟を解脱げだつぐ服ともいいますが、それは修行の障害をしりぞけて解脱を得るから名づけられたのであります。

釈迦牟尼仏によって示されたこの三つの理念によって、このたび釈迦牟尼仏正伝御袈裟普及

協会は、七条衣百肩をおつくりし、みなさまに御供養させていただきます。

願わくは、釈迦牟尼仏の正伝の御袈裟の精神によって世界の平和が実現されますように。

日本平成十三年（仏誕二四六四年）二月吉祥日

（「中外日報」紙の記事を加筆修正した）



袈裟百肩
台灣佛教界へ

贈呈式





式典会場



挨拶する黒田武志住職



香語を唱える阿部總持寺副監院老師



松田紹典先生（聖和女子短期大学長）



熱烈歓迎される黒田住職一行



ワット・パクナム

訪問記

善光寺総代 國 廣 敏 郎

平成十三年二月末、友人達と一週間ほどタイのバンコクに旅行した。数年前まで、仕事で何回も訪れた懐かしい土地。僅かの間にその発展振りと変貌には目を見張るものがあった。とくに交通網の整備が著しい。お蔭で渋滞に悩まされる事無く楽しく観光できた。

最後の日、時間をつくりワット・パクナム寺



院にお参りすることにした。これまで訪ねたことはなかった。タイ語が少し分る友人の通訳で「ワット・パクナムを知っているか？」と運転手さんに尋ねると「知っている。任せておけ」と言う返事。バンコクから東へ三十分。ここだと言うので降りたがどうも感じが違う。近くのお坊さんに日本のお寺と関係があるかと聞くと、

無いとの返事。中国寺院の一つだった。もう一度よく調べ直すとトンブリ地区にあるというところがわかった。方向ちがいだった。市内を南北にチャオ・プラヤ川という大河がありトンブリはその西側になる。とつて返し川を渡ってまた三十分。東京で言えば江東、墨田という風情のある街の狭い路をグルグルまわって遂に探し当てた。お陰で思わぬ観光ができた。

ワット・パクナムは見るからにそびえ立つ伽藍、大寺院である。善光寺の釈迦殿の何倍もあろうかという建物が四塔ないし五塔。そこかしこ改装中という事もあって寺が活気に充ち、ちょうど大きな説教会も開かれていた。幸い善光寺の留学僧（十四回生）真野大成師にお会いでき親しく寺院内をご案内いただく。歩きながら感銘深いお話もお伺いした。

この大寺院でも檀家は零。そもそも上座仏教のタイには日本のような檀家制度がない。寺院

の盛衰は（観光寺でないならば）いつにかかって僧侶の力量による。パクナム寺院もかつては小さなお寺であった。プラ・モンコンテープムニという先代の名僧が、瞑想法を修行にとり入れ遍く人心の救済に力を尽くし今日の隆昌に導いたという。いまでは僧侶三百、修行僧百、バンコク随一の大寺院になっている。仕事帰りの夫婦なのか子どもの手を引いて次々とお参りしている。すべては篤信する信者達の寄進で成り立っているわけである。かつて産業界にいた私の見方で言えば「競争こそ活力の源泉」だ。佛教國として多少は国の支援もあるのだろうか、タイ佛教の活力の秘密は寺院が檀家制度のようなものに依存せず純粹に僧侶自身の力量に依存しているというあたりにあるのかもしれない。

礼拝した堂には特にご本尊はない。中興の祖プラ・モンコンテープムニのご遺体（ミイラ？）と大立像がありそれを前にして信者の方々は合

掌礼拝し瞑想している。一方僧侶（出家者）の
みが集まる修行堂には勿論お釈迦様がお祀りし
てあるが一般の信者（在家者）は入れない。上
座部佛教の原型をみた気がする。

「佛教とくにお釈迦様の教えは誠に今日的で
ある」と真野師がしみじみと述懐しておられた。
釈迦牟尼が仏法を説かれて以来二千五百年。そ
の歴史の中で或る時期佛教も時の権力に媚びた
り、金銭を身に付けたり、また派閥を作ったり
：少しずつ曲がってしまった面がある。タイに
修行に来て、このような真ならざる衣を一枚一
枚剥がしてみると、佛教の本来の姿即ち釈迦牟
尼の教えが見えてきてそれはまことに今日的で
あると言う。私も同感である。だからこそ黒田
方丈が「釈尊に還れ」と諭されているのだとあ
らためて認識する。

以上この寺院を訪ね思わぬ収穫を得た。留学
僧のお陰でお持成しや、上座仏教の真髓にふれ

ることができました。僭越ながらワット・パク
ナムにお参りして私が思うところ、皆様に申し
上げたいことが二つあります。

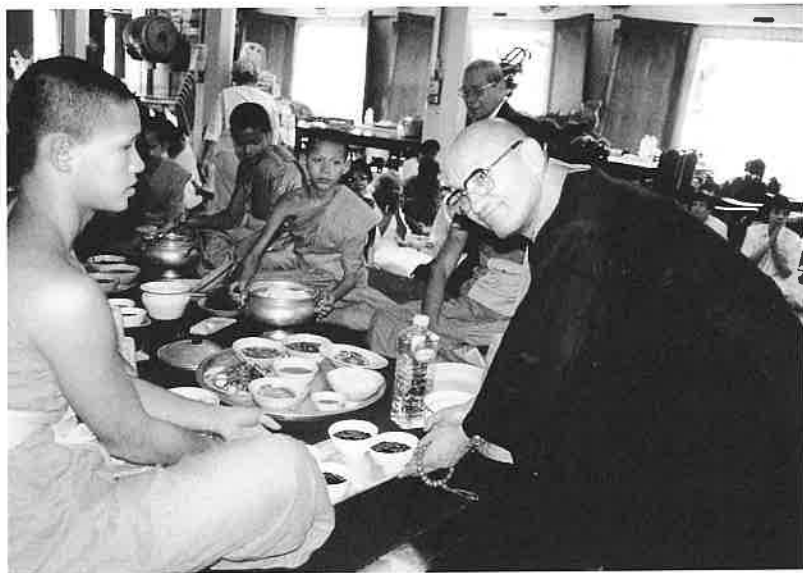
ひとつには私達の善光寺と黒田方丈にご縁を
いただいたことはまことに私達の誇りです。ちよ
うど数十年前、名僧プラ・モンコンテープムニ
がパクナム寺院を一代でバンコク随一の大寺院
に育てたように、黒田方丈もまた僅か三十年余
りで横浜・日野の大地に隠された粗末な庵を関
東屈指の活気溢れる寺にした。これは大事業で
す。この隆昌も決して自分の力ではないと言ひ
きっている。すべては仏の心、檀信徒のお陰。
諸々関わるみなさんの先力だと謙遜してあたわ
ず、自らには一切名利を求めておいででない。
これがまず黒田方丈たるゆえん。こんな方丈に
間違いが生じ、もしも唯我独尊になるなら檀信
徒三千。みんなで方丈の頭をゴツンと叩きましよ
う。私達は檀家だから善光寺に参るわけでは

ないのです。黒田方丈の理念初心即ち「釈尊に還る」に共鳴し集まっているのですから。

さらにいまひとつ私達の浄財の一部で運営されている海外留学生制度は一銭一草活され立派に所期の目的を達成している事をご報告します。例えばワット・パクナムの真野師。日本の仏教では学べなかつたかもしれない「庶民の心に触れる佛教の在り方」をタイ仏教に学んでおります。そして僧侶のあるべき姿を自らに問われておられます。嬉しい限りです。こんな方々がすでに世界に百名以上をも輩出している事実は善光寺檀信徒の誇りです。

檀信徒の一人として、今を大切に少しでも釈迦牟尼の教えに近づくために精進しようと改めて思った次第です。





黒田住職



第 18 回 生

横浜 善光寺 留学僧募集

平成14年度・2002

横浜善光寺留学僧育英会は、海外留学僧を募集いたします。

ご希望の方はご応募ください。

詳しくは、宗教法人横浜善光寺留学僧育英会の
規程ならびに細則をごらんください。



ZENKŌJI
YOKOHAMA

〔目的〕

佛教を修学する者のうち、学業操業ともに優秀にして身心堅固なものを海外に派遣し、または海外より日本国内に受け入れ、佛教の興隆、国家社会の進運に寄与し得る有為な人材を育成することを目的とする。

〔派遣先〕

1. Zen Center of Los Angeles (LA 禅センター)
"923 S.Normandie Ave LA. CA.90006 197SA"
2. Zen Mountain Center of New York (NY 禅センター)
"Box 197,Mt.Tremper,NY 12547 USA"
3. Wat Paknam (ワットパクナム)
"Bhasichareon Bangkok 10160 Thailand"
4. 理事会において必要と認めるその他の国に所在する研究機関、並びに国内佛教関係大学及び寺院

〔派遣期間〕

平成14年4月より1年間

〔給費〕

アメリカ・タイおよびその他の国における滞在に要する
必要経費並びにその往復旅費

〔提出書類〕

1. 論文 (次項による)
 - 論題
 - ① これからの国際興隆と仏教の役割
 - ② 世界平和と仏教徒の誓願
 - ③ 留学僧として私はこれを学びたい
 - ④ 異文化の中で仏教を学ぶいずれか一題を選ぶこと 400字詰原稿
用紙5枚以上 (A4版タテ書き)
2. 保証人と連署した願書
3. 卒業証明書
4. 履歴書
5. 推薦書
6. 健康診断書

〔募集人数〕

平成14年度2～3名

平成13年12月10日、事務局必着のこと

〔発表〕

平成14年1月10日、本人に通知する

横浜善光寺留学僧育英会

〒233 横浜市港南区日野中央1丁目12番9号
TEL.045-845-1371 FAX.045-846-2000

仏教と日本の文化

山北林

私ども日本人の大半は、生れながらにして、

仏教大國日本に育ち、無意識のうちに仏様とは切っても切れない深いつながりを持つようになりました。仏教から受ける有形無形の恩恵はいわば空気みたいなもので、知らず知らずのうちに私共の身体にしみ込んでいて、はっと気のつくことが度々あります。

例えば、私共の日常生活の中にとけ込んでいる生活習慣、或いは普段無意識のうちに使っている言葉や格言を考えてみますと、これが仏教經典の中から生れた日本語かと、驚くことが度々あります。

即ち、ぶつちやうら仏頂面、断末魔、韋駄天、大往生等、

或いは格言として、「地獄の沙汰も金次第」「袖振れ合うも多少の縁」「禍を転じて福となす」等、あげればきりがありませんが、これらはどなたも、自然に身についたものであります。

ご承知の通り、仏教は今から一四五〇年の昔欽明天皇（五三八年、一説には五五二年ともいわれております）の時代に朝鮮半島南部の百濟くだらの国の聖明王によって日本に伝えられました。以来、幾多の名僧高僧によって素晴らしい発展を遂げ、尊い教えと数多くの仏教文化が開花したのであります。今回は特に仏教文化のうち一

部について申し上げます。

一、入浴

仏教文化のうち、私共の日常生活の中で最も感謝すべきは入浴を教えてくださいました。私共は普段生活習慣の一つとして入浴をしていますが、これこそ伝来と同時に日本人に伝えられた恩恵の一つです。

伝来当初は、仏様にお仕えする出家僧侶の方々はお湯で身体を清め、仏様にお仕えしたのですが、一般在家の信者に対しては、施浴といつて入浴を奨励し、身心を清め仏様を拝むと同時に病気の予防、治療、清潔を保つことによって体調を整えるように指導したのが始まりです。伝来後間もなく聖徳太子が建立した大阪の四天王寺は信者の治療等を主体にした寺院で、院内には施薬院、治療院、養老院、施浴院を作り、病気の者或いは貧困にあえぐ人達を救済されたのであります。



また、箱根権現の境内には、神仏混淆時代の金剛院（真言宗）の跡に湯堂がはつきり残っており、入浴といつても、当初は大変戒律がきびしかったため、男子は下帯をしめ、女子は腰巻をして入浴したといわれております。その後、江戸時代の元禄年間（三〇〇年位前）になると、江戸の町に銭湯といわれる風呂屋が開業し、お金を払って入浴するようになりました。

この時から浴槽の汚れを防ぐため裸で入るようになった訳です。やがて、明治時代に入ると欧米思想の影響を受けて男女混淆がやかましくなり、現在のように別々となりました。但し法律できめていないため、ひなびた温泉地等には、昔同様混淆の風習が残っています。

二、日本語

普段何気なく使っている日本語は、会話、言葉、格言等その約七〇％は仏教語なのです。何れも仏教経典の中から使用されたことは驚くば

かりです。思いつくまま、各分野に分けてその一部を列挙してみます。

(一) 食物、料理等

納豆、善哉、沢庵、隠元、豆腐、五穀、般若湯（智水）、精進料理、懷石料理、もつそう飯、油揚げ

(二) 着物、衣類等

法被、袴纏、帽子、白衣、蒲團、手布（手拭）、袈裟、頭陀袋、阿弥陀にかぶる

(三) 住居、建築等

玄関、連子窓、書院、床の間、棚、普請、暖簾、瓦、塔、方丈、灯笼、雪隠、講堂、庫裡、本堂、炬燵、行火、行灯、観音開き

(四) 道具、家具等

旗、幟、扇、花瓶、香炉、燭台、行季、半鐘、鐘樓、柩、琵琶、位牌、楊子、佛像、茶碗、手水鉢

(五) 年中行事等

十二支、破魔矢、節分、彼岸、お盆、盆踊り、縁日、除夜(大晦日)、寒稽古、寒行、修行、精霊流し(灯笼流し)

(六) 病気等

医療、治療、入院、退院、病院、看病、五体、布袋腹、血脈、投薬、病人、病床、六根清浄(目、耳、鼻、舌、身、意(心))、日常生活等

(七)

がらんどろ、あなたまかせ、あまのじやく、世話焼き、冗談をいう、可愛い、有頂天、急転直下、四苦八苦、畜生、愛嬌、娯楽、道楽、歓喜、忿怒、無事、堪忍、だらしなない、勘弁、懺悔、慚愧、邪慳、奈落の底、行脚、獅子奮迅、しよつちゆう(初中終)、電光石火、物見遊山、招待、呵責、無分別、馬鹿、無念、挨拶、未來、円満、引導を渡す、絶対、真実、

(八) 格言または教訓

光明、冥利、安心、工夫、開眼、依怙(いき)、人間、今生、有為転変、相続、金の亡者、頂戴、投機、遺言、火の車、せちがらい、不如意、融通、ごまのはえ、他力本願、極楽、地獄

悪事千里を走る、鬼に金棒、三人よれば文殊の智慧、子は三界の首枷、楽あれば苦あり、知らぬが仏、聞いて極楽見て地獄、弱り目に祟り目、門前の小僧習わぬ 経読む、縁は異なもの

三、天文学、歴史、地理学

これらの学問は、仏教が伝来後五〇年して百済の高僧によつて輸入され、その後は、唐に留学した僧達によつて、急速に発展したという。当時の日食月食、彗星等の天文異変は恐るべき正確な記録が残されており、特に、天智天皇は青年時代から留学僧について、天文暦学を

学び(六六〇年)、今から一三四〇年前の昔、水時計(漏刻器)を作り、時刻を測定して梵鐘により、これを報知したことは有名であります。

四、美術工芸

仏像等の製作技術、或いは彫刻、絵画、書字等、何れも仏教伝来の時、多くの僧侶達によってもたらされたもので、当時の学識者は僧侶であり、技術指導は何れも僧侶であったという。

五、土木、測量、建築

日本人がまだ掘立小屋とか横穴住居ぐらしの時代に、素晴らしい寺院を建立したのを眼の前に見た時の日本人の驚きは如何ばかりだったことかと推察致します。

六、茶道、墨絵(水墨画)

両者は、何れも臨済宗の僧によって、日本に伝来した文化でその後日本人の手によって大成されたものです。茶道は、栄西禅師によって茶が輸入されて以来、千利休が完成させたといわ

れています。

また、墨絵は、同じく雪舟禅師によって開発されたといわれています。

七、食文化

何れも、仏教伝来以後、数多くの食品が輸入され、それに日本の気候風土に合わせて開発したものが多し。たくあん、味噌、納豆、豆腐、精進料理等。

山北 林

大正九年、浜松市に生まれる。海軍少年航空兵(予科練)として海軍軍人となる。勤務先／実施部隊は連合艦隊司令部付戦艦大和・陸奥・長門・金剛。第二艦隊司令部付巡洋艦島海、その他。教育部隊(教官)。

善光寺檀徒



癌・動脈硬化から身を守るには

中 村 治 雄

私達の生命を脅かす病気で、最大のものは癌で、次いで心臓病、脳卒中です。これらの病気から身を守ることができれば、私達はほぼ10年近くは長生きできると言われています。

最近の医学は著しく進歩し、どうすればそれらの病気にかからないですむかも少しずつ解明されるようになってきました。

以下、それらの点についてまとめてみましょう。

1. 食べ過ぎないこと

肥ると、血圧、血糖、中性脂肪などの増加、善玉コレステロールの減少を示しやすい。

2. 油脂のとり方

常温で塊になっている脂肪は、悪玉コレステロールを増加しやすい。魚、豆類を積極的に摂ることで、それらの油がコレステロール、中性脂肪を低下させます。さらに血液をサラサラさせ、血栓を作りにくくします。

すでに血液中のコレステロールが高いとか糖尿病があれば、卵、内蔵、もつなどの類は控えめに。

3. 糖分のとり方

砂糖、果糖を摂り過ぎると、中性脂肪が増加し、善玉コレステロールが低下しやすくなります。

御飯、パン、うどん、そばの類が望ましく、果物は中性脂肪、血糖が高い場合には摂り過ぎにならぬようにしましょう。

4. 肉類のとり方

脂肪の含まれ方の少ない肉が望まれます。それでも余分に摂るとホモシステインが増加し、動脈硬化がすすむことが指摘されていますので、魚類を2に対して、獣肉は1くらいにした方がよいと思います。

5. 豆類のとり方

大豆、枝豆、納豆、豆腐など豆類は是非積極的に摂取することをすすめます。

6. 野菜のとり方

野菜は繊維成分が多く、悪玉コレステロールの排泄を促すと共に、大腸癌の発生を防止してくれます。しかも、ビタミンB6、B12、葉酸等を含み、ホモシステインを低下させてくれます。アメリカでは脳卒中の発生を減らしたという事実があります。

また、緑黄色野菜で色の濃いもの、ブロッコリー、ニンジンなどもすすめられます。

7. 嗜好品について

煙草は全くメリットにはなりません。アルコールは、飲料の種類を問わず、少量（酒1合、ウイスキーダブル1杯程度まで）なら毎日摂られて大丈夫です。飲み過ぎは癌、脳卒中を増やしてしまいます。

コーヒーも1日2～3杯まで、それもフィルターを通ったものをすすめます。

8. 運動について

大腿部の筋肉を動かす運動、つまり歩行、ジョギングがすすめられます。1日に3km程度実行されることです。少しスピードを上げるようにすることもよいでしょう。

ただ高齢者や、心臓病などがあれば、早朝の運動は控えて下さい。事故の多いことも解っています。

以上、きわめて常識的な事項でもありますが、基本的には、いかに実行し、継続して行くのがポイントです。

是非、長生きをしていただき、一日一日をエンジョイしてほしいものです。（三越厚生事業団常務理事、防衛医科大学校名誉教授）

日本仏教雑感

私の目にうつった日本仏教

哲学博士　　グルバクシユ・シン

黒田武志老師には、私は格別な関心を抱いている。六年前、来日して最初に知遇を得た一人である。老師には、さまざまな理由により、強い印象を受けた。その理由は、老師が、教主ブツダの教えを独特な方法をもって敷衍しておりその限られた方法をもって最大の効果と活動を展開している、私は思う。日本を訪れる諸外国の仏教学徒の間で、すでに老師の名声は高く広く知られている。そのみならず私はもっと個人的な理由から、老師に親近感を抱いている。

かつて、老師に会った際、会話の中に、前角博雄老師の名が出てきたのである。偶然ではあるが、日本に来た当初、私を知るようになったもう一人の偉大な老師、これが前角老師である。師は禅を通してアメリカ仏教興隆に生涯を捧げ、その生きざまを著書に残され、私はその生き方に傾倒していた。その前角老師が黒田武志老師の実兄であるを知って、なお一層黒田武志老師に親しみを感じるようになった。

そのご縁で『成寿』に一文を載せさせていた

だくことになり、以下の三、四点について、私
が日本の仏教に特に強く感じていることを述べ
てみたい。

日本の仏教はインドから、中国を経て釈迦入
滅約千年後に伝来している。その間、原始仏教
とはいささか違いが生じているように思う。ま
ず私の国の原始仏教では「肉食」と「飲酒」は、
特別な場合のみブツダによって許可された。こ
れはいつまでも、日常的には、決して正当化さ
れることはないのである。ここに、例外と規則
(戒律) の間に大きな相異があるのではないだ
ろうか。

私の理解する限りでは、日本の仏教徒は、自
分達の肉食と飲酒を正当化している。これは、
私はなんとも、受け入れることができない。こ
れらは、私にとっては、道理に叶っていないと
思うのである。

規程(戒律)は規則であるということを、忘



れるべきではない。若しも仏教の基本的な理念を修正しようとするならば、それは結局、我々が、我々のために規則を創った教主ブツダの智慧そのものを疑うことになるからである。

仏教徒が肉食を正当化する他の理由は、仏教僧が托鉢に廻る時、布施された凡ての物を受容しなければならぬと言う教えにもとずいていゝる。これは現実的ではない。

非暴力は、教主ブツダの我々に与えられた基本的理念の一つである。私の理解するところによれば、肉を食し、肉食を正当化すれば、ブツダの根本的な教説に従っていないことになる。つまりブツダによって与えられた偉大な普遍的規則を無視し、自らの人間的弱さに適合させているということにもなる。

日本の仏教徒たち、一般の僧や高位の僧たちも、「文化の相違」ということからその整合性を語ったとしても、これは核心から乖離している

と言わざるを得ない。このことは、私にとつて、仏教の規範の限られた理解に基づいた自らの観点からのものであり、私の正直な見解として発言してみたいと思うのである。いまだ大乘仏教を充分承知しない私の見解は誤っているかも知れないが、このことは私が感じていることなのである。

いまひとつ私が取り上げたいと思う問題は、瞑想についてである。瞑想は仏教の中心的な問題であり異論はない。また瞑想は核心的なものでそれはブツダの教説の真髄でもある。私は偉大な仏教者である道元の著作を読んで、非常に感銘を受けた。道元の坐禅の重視は、驚くべきものである。『正法眼蔵』の各ページは坐禅を重要なものと説いている。道元の坐禅中心の生活は、信奉者たちの模範である。

しかしながら、現代日本において仏教徒は、瞑想の重要性を強調はしても、仏陀が強調した

ような仏教徒の実践の中心ではなくなってしまう
たようである。瞑想はより形式化し、日常的な
生活と実践にはつなげていない。今日出会っ
た日本の仏教者は、瞑想が中心的なものである
必要性を異口同音に述べている。しかしこれも
或る意味で不思議な感じがする。いつの時代で
も瞑想は、仏教者の生活の中心となるべきだと
思う。

また多くの人々の生活となつて欲しいもので
ある。

いまひとつ、日本の同朋としての仏教者たち
は、インドにおける仏教の現状に対する知識が
欠如しているように思う。ある時代を境にして、
インドには仏教徒はいないと日本の歴史家は言
う。これは真実ではない。

私の立場から見れば、インドの仏教は、人々
の生活の中に、伝統的存在、生活の方法、完全
なるエトスとなつて取り込まれ脈々と生きてお

り、仏教が「思想体系」「思想構造」「世界観」
として、いまでもインド人の生活において力強
く生きていたのである。従つてインド人の総合
的知恵や公衆の庶民の知恵の一部分なのである。
人々はこれらの知恵の根源に気がつかないかも
知れない。しかし、それを気づかずに実行して
いることも事実である。インド人のもつ精神の
美しさは、この柔軟性にある。この知恵を仏教
とかヒンズーの枠組に入れて区分化することは
困難であり、広い意味の宗教として、信仰し実
践していると理解するのが正しいと思う。これ
らのいずれの標準的なものもすべてブツダにさ
かのぼることができるのである。そしてそれら
は自然に吸収されて価値となり、文化的資産と
なっている。これは、民衆の生活のパターンを
形成して、真実の価値となっている。そしてつ
いでに述べればこれら文化資産の上部構造は、
言語なのである。教主ブツダの用いた言語は教

訓として多く採用され、インドにおいて、民衆を陶冶し今なお生きた力を有している。「ブッディ」の如き語や、教主ブツダの聖なる生活について記述する聖人伝の如きもそれである。「ヴィパッサナー」（止観）の如きは、インドのインテリゲンチャーの間では、最もポピュラーなことからである。それ故にインドの仏教は生きており、まさにインドの宗教であり、インドの文化的、精神的遺産であることは言うまでもない。

教主ブツダを生んだ大地は、その後も、なおその豊かさを失ってはいない。ブツダは偉大な大地に永遠に生き続けている。日本人の精神的構造から定義される如き意味の仏教は、確かにインドに存在しないかも知れない。しかしながら、菩薩行はなお、ブツダの終熄せざる務めとして継続しつづけているのである。もし我々がその地を觀ようという純粹な関心を持っているならば、我々は眼を見開かなければならない。

時間的、空間的な両面から、私が挙げた重要な事柄について、以上概観してみたのである。

（翻訳・文責 福田孝雄）



生涯ただ一筋に——曹洞宗学界の乾坤第一峯

——鏡島元隆先生をお偲びして——

駒沢女子大学学長 東 隆 眞

台湾で、釈迦牟尼仏正伝袈裟普及協会の主催による中華民国仏教青年会を通じてのお袈裟百肩寄進の行事に名誉顧問として臨んでいるところ、恩師鏡島元隆先生（駒澤大学第二四代総長）ご遷化の訃報が飛びこんだ。

平成十三年二月十九日、老衰のため、ご自坊の静岡県蒲原町、泉龍寺東堂（第二〇世）としてご遷化になった。満八十八歳であった。

私は、帰国して、翌朝早く泉龍寺に走り、密葬のまえ、先生に対面した。「なんの苦もなく、

静かに息をひきとりました」と、和子夫人はおっしゃった。

遺偈は、「潜行密用、道履未全、転歩劫外、生磨研」。

「道履未だ全し」といい、「生生に磨研せん」といい、先生の仏道への願い、学問に対する謙虚さを拝する。

また、辞世の句が掲げてあった。

「如来より 賜り給ひしこのいのち 返し
まつらん いまぞ このとき」

わがいのちは、わがいのちにしてわがいのちにあらず。み仏のおいのちである。いま、生死を超えたみ仏のみもとにおかえしすると、私は拝する。先生の死生観というか、信仰観というか、決定したお覚悟のほどもを思う。

衛藤先生の志継ぎ新地平開く

鏡島先生は、道元禪師と曹洞宗学の研究、指導に一筋に打ち込んでこられた。全生涯を、ただ、ただ、この一事にそそいでこられた曹洞宗学界の乾坤第一峯であった。

それは、衛藤即応先生の志をうけつぐものであり、さらに新しい地平を開くところがあつた。衛藤先生の志をうけつぐというのは、いろいろあるが、道元禪師の説かれる仏法を万人に開かれたものとして学び、研究、指導をすすめていくということであり、さらに新しい地平を開くというのは、衛藤先生が、道元禪師の仏法を

悟りの仏法というよりは信の仏法としてうけとめられたところを、先生は、なお誓願の仏法であることを強調し、また、凡夫の宗教であり、共生の禪であり、報謝の禪であると説かれたことであろう。最晩年の著書『道元禪師』（春秋社刊）に、くわしい。私は、先生に請われて、本書の書評を『中外日報』（平成九年十一月八日付）に寄せた。本書は、先生が一代を賭けて到達された学問と信仰の一致点の告白の書であつたともいえよう。

昨今の宗学界には憂いと怒りと批判

さて、また、先生は、昨今の曹洞宗学界の状況に深い憂いと、激しい怒りと、厳しい批判を抱いておられた。すぐれた先学たちの仏法を学ぶことを忘れ、勝手放題のことを言いちらかし、良識をそなえた大方の仏教学者の響壁を買い、仏教を学ぶ学生たちをいたずらにとまどわせて



いる若い教授先生たち。あたりの様子をうかがい、時流に迎合し、無責任な評論家となり、陰口を利きあい、曲学阿世の輩となりはてた老いぼれ学者たち。先生は、困惑し、眉をひそめ、激しく私に語られた。

先生は駒澤大学総長のころ、突如、なんの前触れもなく、私庵にお立ち寄りになった。こういうことは、先生としては、異例中の異例の行動であろうとおもう。が、あいにく私は不在であった。妻はあわてふためいてうろろするほかなかつたようであるが、「東先生は、こういうところにお住まいですか」と、ぼつんとおっしゃつたまま、お茶をおのみになり、十分ばかりして、お帰りになった。ほとんど会話はなかつたらしい。

しかし、妻は、寡黙な先生のお姿にはじめて接して、ますます尊敬の念を深めたのであった。どんなに大勢いようと、夫のお相手はどういう

お方であるか、陰にいてちゃんと見抜いているのが妻というものである。妻は、永い間、私から先生のお人柄を聞かされていたせいもあるかも知れないが、お会いしてからというものは、一層、ファンになったのである。

先生をおしのびするにあたって、どんなことばがふさわしいだろうか。誠実、寡黙、簡潔、非妥協、明晰、親切といった単語が思いつくままに浮かぶ。

先生は平成七年、五十余年にわたる駒澤大学勤務を退職されるにあたり、その退職金その他を合わせた六千万円余を全額、宗門、学界に寄附された。後進の育成を願うてのことである。このような例を、私は寡聞にして他に知らない。宗門に生き、宗学を学ぶ私たちは、先生の切なる願いはどこにあるかということ、深く深く心の底に問いかえしてみなければならぬ。

〔中外日報〕平成十三年三月一日付

さらに書き添えておきたい。

それは、故鏡島元隆先生と、善光寺住職黒田武志老師との永い深いつながりである。

黒田老師は、駒澤大学仏教学部仏教科を昭和三十五年三月に卒業し、ひきつづいて同大学院人文科学研究科修士課程を私と一緒に終了したのであるが、老師は、昭和二十六年に創立した駒澤大学茶道部、一服会に在籍し、二十五年にわたって会長をつとめていた。後任の新美昌道会長は、平成十二年五月四日、駒澤大学茶道部創立五十周年記念誌としてB5版百頁の『喫茶去』を出版した。本書の二十頁から四十七頁にわたって、黒田老師は「生き続ける利休の精神」と題して、茶道の真髓と駒大茶道部の歴史の一端を情熱をもって記している。詳しいことは右にゆずるが、鏡島先生は、昭和六一年四月、駒澤大学総長に就任されるまで、二十五年あまりの永きにわたって茶道部の部長として部の発展

に尽力されるところがあった。鏡島先生は、「よく茶禪一致と言われ、茶道と禅道とは一つであると言われる。この言葉はよく言われ言葉であるが、そのことが本当に分かるのは容易なことではない。(略)禅とは、心を学び、心を錬ることによって『道』に達するものである。従って、茶道もそれが茶「道」であるためには、心を学び、心を錬ることがなければならぬ(略)。曹洞宗では坐禅の修行を主として心を学び、心を錬る(略)。

茶の作法を学ぶことを通して心を学び、心を錬ることができるか、それとは別に参禅を介しなければ心を学び、心を錬ることができないか、ということとはむずかしい問題であり、古来の茶道家の苦心の存するところであろうが、禅の大学である本学に学ぶ諸君は後の道を進まれんことを望むのである」とお示しになっている。

もちろん鏡島先生と黒田老師とは、師弟の関

係であり、まさに親子ほども年齢はへだたっているのである。しかしながら、駒澤大学茶道部一服会は鏡島元隆部長と黒田武志会長との名コンビよろしく人事配置の妙を得て、その発展、興隆に資するところがあつたのである。

さらにまた、鏡島元隆先生と黒田老師とのご縁は続く。

周知のとおり、黒田老師は、昭和五十九年に、「横浜善光寺留学僧育英会」(当初は善光寺海外留学僧派遣育英会とよんだ)を設立した。黒田老師は、この育英会の設立は茶道精神と根底を同じくするものであると言っている。本年度満十七年をむかえるが、この間に二十国、一地域、百二名の育英生を数えるに至った。わが国の仏教寺院で単独の育英事業を継続して実行し、後進を育成しているのは、きわめてめずらしく、私は、黒田老師の捨身の菩薩行に共鳴し、同感し、尊敬の念をもっており、創立当初より、理

事の立場を汚している。この育英会の趣旨に賛同していただいた鏡島元隆先生は、昭和五十九年の創立当初から育英会顧問として御指導、御協力を仰いできたのである。

善光寺の檀信徒各位をはじめ、日本国内の各宗の諸大徳はもとより、海外の高僧、学識経験者、実力者の総力を結集して、育英会は成り立っているのであるが、黒田老師の深い理解者であり、指導者であつた鏡島元隆先生の御恩にあらためて深く謝意を表さなければならぬという思いが、私の胸中にある。



喧嘩禅

東郷 敏

東京オリンピックを前に沸きかえる三十九年の夏。ナリス化粧品（大阪市）の社は三日間の臨時休業、全社員あげての参禅会を開いた。その日横浜・鶴見大本山總持寺門前の仏具屋から四トン積みのトラック、百五十人分の坐蒲ざぶや作務衣、鉦かね、太鼓たいこ、打板だはんなどが運びこまれていた。村岡満義社長（故人）の「本立もとちて道生みちうす。これが基本や」という一言による。日課も起床から就寝まで本山の規則どおりとする。この参禅会の指導には本山からひとりの雲水をまねい

ていた。

当日、広い会議室はにわか禅堂に一変。『堂内』はピン、と張りつめる。雲水がおもむろに坐香を立て、引磬いんきん三声。そのまま止静しじやうの世界に入った。会社にとって歴史的な一瞬。

数秒して私は下腹部の印をほどき合掌。警策きやうさくを乞うポーズをとる。静かに背後に回った雲水警策を構え、威儀に満ち強烈な一打を私の肩に打ちすえた。下腹に万心の力をこめ、その痛棒を待ち止めた。その瞬間警策棒は真二つに折れ

とび散ってしまった。その間、別のだれかが合掌する。警策を受けまたすぐ私も合掌した。これに引き具されるように堂内のあちこち、やがて全員が合掌し雲水に警策を乞う姿となった。もう手がつけられない。座が進むごとに修羅場と化する。

このとき、雲水は二十六歳。私も二十六歳。やがて私のみならず幹部社員の肩から血が吹き出し作務衣を染める。作務衣を血染めにした者が十人を越えていた。一方尋常でない状況にひとり立ち向かう雲水。息を荒らげ、肩で喘いでいる。顔から汗が飛び散り足はよろよろ。打ちすえる警策の狙いもやがて定まらなくなり、警策の握り手も血汐に染まる。手のひら一杯のママがはじけていたのだ。

「ヤメローツ！ ばかもの、おまえらのやっているのは坐禅やないツ！ 喧嘩やないかッ！」
社長の一喝。堂内は静まり返った。その中で

だれかが、羯諦羯諦波羅羯諦ぎやあていぎやあていはらぎやあてい、と称えた。やがて、それは全員による『般若心経』の大喝となり、社員同士、また雲水と抱きあい感動を共有する。

これは私が仕組んだ雲水に対する果たし合いだったのである。その僅か十日前、社長のツルの一声、幹部社員七名社長に連れられ總持寺の夏季摂心会（八日間）に参加した。私も立場上しかたがない。給料のためとしぶしぶ従う。それでもなんとかごまかし大阪に帰ってこようという気持ちだった。ところが禅堂に入るとその異様な環境に下肝を抜かれる。遂に逃げ出す機会を失う、わけのわからぬままに。ただ「坐る」すわるだけなのに私は半跏趺坐はんかふたざさえ満足にできなかつた。この雲水「だからキサマは生半可なのだ」という。そんな状況で何日たっても腹は坐らず、思いは支離滅裂修行どころではない。

求められる感謝報恩の心など爪の垢あかほども出てこない。しかも朝から晩まで規則づくめの生活。こんな環境を自ら求め修行とやらをしている変わり者がいることに、心底驚く、その一人が先の雲水。なにもここまでせずとも、相應の人間になれる方法はいくらもあるだろうにと。

禅堂には相当数の雲水がいて警策をふるう。

その中に容赦のない、骨を砕かんばかりの警策を振う雲水。ある時たまらずに振り返ってみる。するとその雲水、私の背に合掌している。おや？

と思う間もない。

「コラッ！たるんだる。キサマッ、死ねえ!!」

堂を真二つに割る罵声。瞬間、私の体はたしかに弾け上がったのである。クソッ!!

「教えずして殺す。これを虐まじやくと謂う」

かの孔子先生の言葉だ。まさにその通り！私は囚とらわれの身。この場では手も足も出ない。しかも、ひたすら私に狙いをつけているとしか思

えない。なにか仕返しの手立てはないものかと。そればかり考えるようになっていた。社長に話すと、

「お前の目は節穴か。あの雲水こそわしが求めているお方。なあ、トーゴ。人の吐く言葉はその人の心の現われ、その人の全人格をあらわしている。人を叱る、人を直す、人にムチを入れるのは、並の心掛けと修行でできるもんやない。あの方にはそれができる。エライッ！」

ところが丁度そのとき、ふらっと彼の雲水が部屋に入ってきた。堂内とは別人のようだ。話してみると人柄の温かさを感じなくもない。実に天真爛漫てんしんらんまん。私は新鮮な感動さえ味わった。しかし、仕返しのを考えを捨てたわけではなかった。總持寺を出て三日後、幹部十七人の協力をえて、その雲水を会社で待ち受けていたのである。以来ことあるごとに雲水と社員の闘いは続き、休むことはなかった。

あの事件があつて三年後。海外修行を終え帰国した雲水。寺を建てたいと打ち明ける。行き掛かり上仕方ない受けて立つ。私は、にわか勧進聖ひじりとなり、仕事にからめ三カ月間全国を飛び回り、約千四百名の方から一千万円に近い寄進を受けた。村岡社長も大口の喜捨。甲斐あつて昭和四十四年ついに善光寺（横浜市）が創建されたのである（開基村岡満義）。

「寺のため嫁の存在は欠かせない」ということで、社長の命もあり、社長秘書の加藤原倫子みちさんをお世話した。

横浜善光寺はいまや檀家三千五百。関東屈指の大寺である。鴉からすの啼かない日はあつても「ミチコ、ミチコ」と方丈（住職）の妻を連呼する声の聞かれない日はない。

倫子夫人なくしてもはや方丈も、善光寺もない様子である。

十五年前、開創三十年を期に檀信徒の「ひと口べらし」の浄財により横浜善光寺留学僧育英会を発足させる。宗派・男女・国籍を問わず海外二十カ国、百名以上の留学僧を送り出し、また受け入れている。

かつての雲水、黒田武志方丈は仏道に全身全霊を投じ、ただひたすら人心救済に燃焼する。いまの世の傑僧であると私は信じ仰望ぎやうぼうする。この師友との篤い「出逢い」に心から喜びをもつものである。これこそ道元の謂う「われさいわいにして人と逢うなり」か。

東郷 敏 成寿堂ナリス化粧品顧問。昭和12年、鹿児島生まれ。31年、鹿児島商業高校卒業後、ナリス化粧品入社。同社常務取締役をへて、平成9年、退社。

（01春号「禅と念佛」に掲載されたものです）



テーマ 「世界平和と仏教の誓願」

人間の性質変換する

仏陀の教説は方法を明示

エルワボラ・ニヤナラタナ

平和とは、単に紛争が存在しないというだけではない。もっと積極的な現象である。即ち、平和とは紛争がないと同様に、紛争を発生させる構造的諸条件の根絶を意味している。

第二次世界大戦の終結以来、平和の確立を阻む最も重要な要因として存在する国内的な闘争

は、民族のアイデンティティーや社会集団からの排除、持つ者と持たざる者との間の矛盾、人権に対する暴力的侵害、マイノリティーや女性やカースト集団に対する差別などに関連する諸問題から発生している。民衆の願望が抑圧されたとき、その結果として抵抗運動や社会的政治的運動が発生する。抵抗運動は暴力によって抑圧され、暴力はさらなる暴力を生起する。しかし、基本的な理由は人間の本性、性格、権力欲、物質的なものへの関心、名誉欲、復讐心、人間平等の立場の受け入れ拒否、不寛容性であって、

それは世界平和の道の上に存在する闘争に関わる諸条件の中に見出せる。

これら人間の基本的特性が人々及びその指導者の行動を支配し続ける間、闘争は我々と共に永久に存続することになるだろう。

仏教の誓願は、平和を創り出す行為の中で、人間の特性を回復するための道標を与える。仏陀の教説は、生活において人間の性質を交換する方法を明示する。仏教の誓願は、暴力には非暴力の、報復には慈愛の、復讐には寛容の、貪欲には布施の、野心には退くことの、所有欲には放棄の徳を具体的に示す。

仏教徒は、さまざまな相異に関わらず、全人類を平等に受け入れる。今日、紛争の主要な理由となっている、いかなる人間・集団の排除もしないというのが仏教徒の誓願である。

仏陀はまた先駆的民主主義者であった。仏陀の概念では、国は民衆によって創り出される。

このような政府の組織は透明性をもち、民衆に必要なものであり、極めて重要である。なぜなら、殆どの国内的紛争は、民衆の意志を無視する政府によって惹き起こされるからである。

仏陀の教説と生活の経験が教えることは、人々の性質を改善するために極めて重要な方法である。それなくして世界に平和を実現することは困難であろう。(スリランカ)

倫理や道徳の育成

適切な教育の支援必要

スゲング・タント

仏教によれば、平和を創造する重要な要素は、倫理や道徳の向上であり、個人の感情から起こる精神の安らぎを生むことである。人々が単にうわべの知識で平和を語る時、世界の平和は実

現から遠いものになってしまう。

仏教徒の誓願の一つは、最高の幸福やニルバナ（涅槃）を実現させる倫理的・道徳的・発達に関わることである。すべての仏教徒は、世界に平和や調和を実現するための教育を支援しなければならぬ。

仏教徒の教育は、教師から学生に知識を譲渡することを意味するのみでなく、総合的な人格を発達させるために、両者に関わり合うことである。仏教徒の教育は、智慧を暗から明に変化させるための過程である。人々が他人の生活を尊び、責任を負い、何がなされるべきかを識別できるのは教育課程を通してである。人は自分の生活と同様に他人の生活を思いやり、尊重する心構えを発達させなければならない。

今日、人類は精神における内面の安らぎへの配慮を怠ってきた。もちろん、技術の発明が多くの快適さをもたらしてきた過程を否定するも

のではない。しかし実際に今日起こっているのは、人類が科学技術の奴隷になっていることである。人類はますます利己的かつ精神的・不毛に陥っている。これらの問題を引き起こす原因の一つは、人々が選んだ不適切な教育システムである。

知識が精神的価値と結合するならば、活力ある発達の源となるであろう。仏教によれば、人間の内なる安らぎは、すべての個人の内に潜む認識、感動、心理面の総合的発達である。

仏教の誓願の一つは、日常生活における倫理と道徳を養うことにある。道徳の育成には、教育の正しいシステムが不可欠である。智慧と倫理を有する人は、自分自身や家族、社会を幸福と進歩に導くだろう。もし人が知識のみを開発し、倫理面を怠るならば、自分自身や家族、社会全体に災いを及ぼすことになるだろう。

すべての仏教徒が、教育を通して倫理や道徳

を開発するための誓願を立てるならば、世界平和は実現できる。心の中に平和をもつ人々は罪悪や暗黒の力に屈することはない。彼らは社会の中で正しく指導する強い意志を有する。真の世界平和は、心の内に平和の精神が浸透していくことにより成就される。(インドネシア)

「空・無」を具体化し

平和の実現に努力すべし

鄭 貴 霞

私は台湾に生まれ育ち、二十年前にアメリカに移り住み、約四年前に日本へ仏教の修学にきた。高野山で密教を二年勉強し、得度。花園大学大学院では仏教と禅を修め、三月に卒業予定である。卒業後は大谷大学の後期博士課程に入学したいと思っている。



日本の仏教は学術的研究が進んでおり、究極的な真理に到達しているのではないか。特に空の理解はすばらしい。無常を理解出来たら世界は平和になる。また日本の仏教芸術、建築、茶道、華道等の文化も世界に紹介すべきだと思う。学業完成後はニューヨークに帰りたい。そこには在家の教学組織があり、仏教を弘めている。そこで進歩的な仏教を中国語、英語に翻訳して流布したい。これが私の将来の仕事だと信じている。

約三十年前に『金剛経』の無執着を知るに至り、以後、私はそれを実践してきた。そこで感じたことは、人と争わないのは心が平和だからであり、世界平和を願う心はみな同じであるということだ。仏教徒として心の平和を一般に普及し、仏教を弘めることこそ人々を平和へ導く唯一の道と信じている。

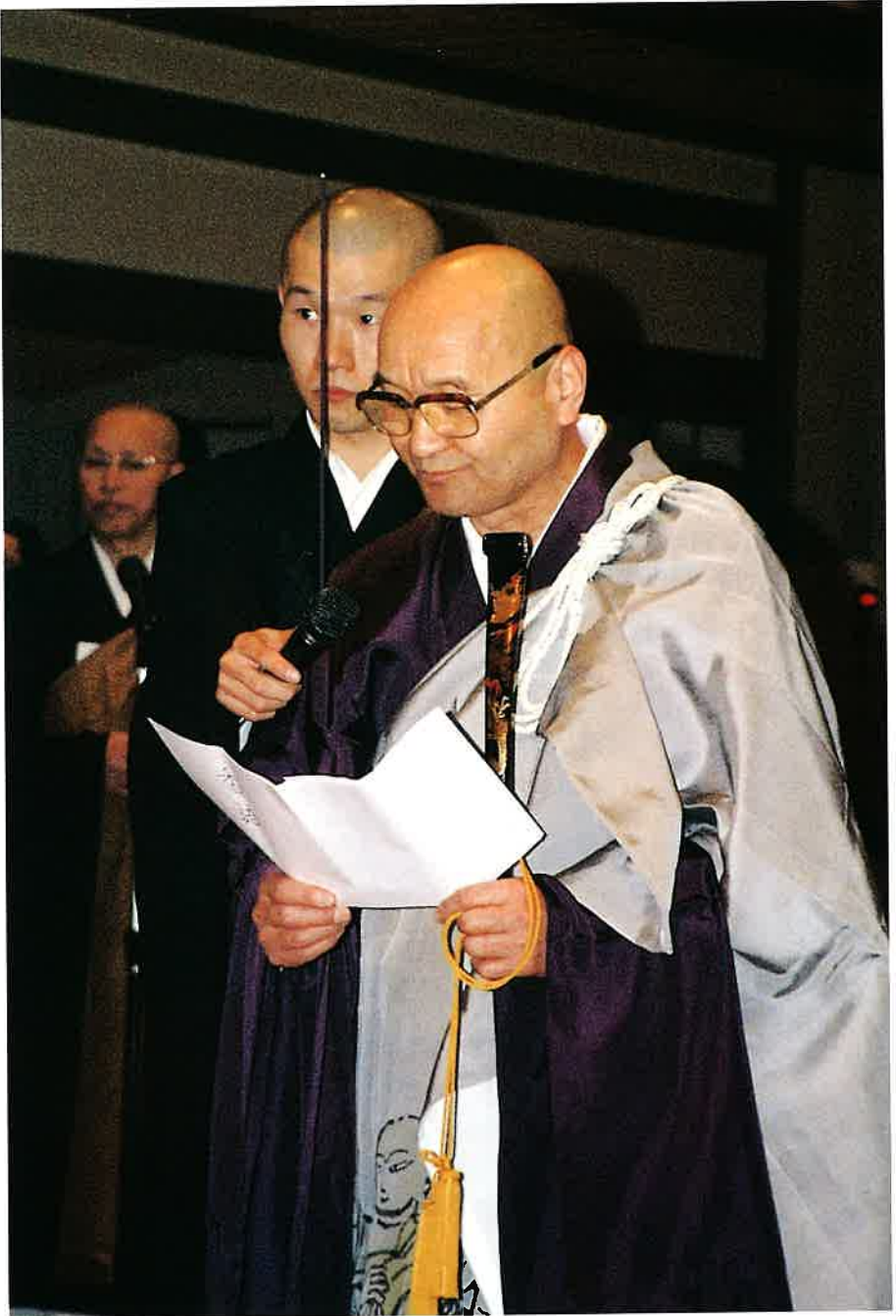
世界は中世の有神論から近世・近代のヒュー

マニズムに転換し、西洋では人間は特別な尊貴性と王者性を持つと考え、人間はすべてを支配し、人間と他の生き物との間に画然たる区別を引いた。神の座に坐った西洋の人間は、神の没落と同時に没落し、人々は抛り所のない、むなししい虚無主義に陥った。

しかし東洋の見方では、人間と他の万物は同じ一つの「いのち」を生きる者であり、無差別平等だ。それで、いま多くの人々が新しい転換期の予感を抱き、仏教のナチュラリズムに注目しているのである。

仏教は、西洋世界で確立した自律的実体思维を、自らの非思量底の世界の中に包み、「無相の自己」の大機大用、真人の躍動、無住の本より働き出て諸法を建立する主体性を確立し、真に「空・無」を具体化・実存化し、その上に立った「世界平和」の実現へと努力すべきである。

留学育英僧 辞令交付式



導師 黒田武志理事長

辞令交付



スゲング・タント師



エルワボラ・ニヤラタナ師

(中央) 鄭貴霞氏





ワットパクナムより安居修了書を受取る黒田博志師（上）
福田智照師（右）





東隆眞先生の挨拶

黒田俊雄老師

中村治雄氏の挨拶



【育英生のデータ】

▶採用総数 全102件（内訳＝新規採用86人、継続16人）

▶関係国 20カ国及び1地域

〈育英生の国籍〉

アメリカ▷フランス▷イギリス▷ドイツ▷ポーランド▷ブラジル
▷タイ▷スリランカ▷ベトナム▷バングラデシュ▷インドネシア
▷韓国▷台湾▷中国▷日本（以上、14カ国及び1地域）

〈派遣先〉

- ◎タイ＝ワットパクナム▷ワットサラディーン▷マハチュラロンコン仏教大学
- ◎インド＝カルカッタ大学▷マイソール大学▷プーナ大学▷マドラス大学
- ◎スリランカ＝ケラニア大学▷オープン大学
- ◎カンボジア＝ナロム寺院
- ◎ブラジル＝参玄禅堂
- ◎アメリカ＝ロサンゼルス禅センター▷ミネソタ禅センター▷ニューヨーク禅センター▷バレー禅堂▷禅マウンテンセンター▷スタンフォード大学
- ◎イギリス＝オックスフォード大学▷ケンブリッジ大学▷ウォルソン大学▷ロンドン大学
- ◎ドイツ＝ライプチヒ大学
- ◎オランダ＝ライデン大学
- ◎イタリア
- ◎スイス＝ローザンヌ大学
- ◎オーストリア＝ウィーン大学
- ◎韓国＝東国大学
- ◎台湾＝ファクワング研究所
- ◎日本＝駒澤大学▷東京大学▷大正大学▷立正大学▷東洋大学▷東北大学▷仏教大学▷龍谷大学▷花園大学▷上智大学▷心月庵▷大菩薩禅堂▷愛知学院大学▷大阪教育大学

（以上、14カ国及び1地域）

育英会寄付者

黙仙寺 故阿部慈園殿

大光院 宮林昭彦殿

長泉寺 柴田秀晃殿

興徳寺 阿部珪仁殿

小田原 潮音寺殿

武田 文雄殿

池田 耕三殿

桐元 大智殿

伊藤 政子殿

小澤 邦義殿

細井 勉殿

貞昌 院殿

蓮池 泰乘殿

滝澤 孝子殿

大田原小学校六年五組同級会殿

川崎中学校祈念会殿

井高 帰山殿

谷口 武殿

越石商店殿

初澤 毅殿

下田 恒治殿

寺林 久義殿

瀬之間和仁殿

華綾学園殿

岡田 哲道殿

山口今朝雪殿

富田 林産殿

土屋 武彌殿

東部トラベル殿

井筒 屋殿

従野 公徹殿

面川 勝治殿

良長 院殿

高橋孝一・則孝殿

鈴木光太郎殿

瀧澤 武雄殿

國廣 敏郎殿

和田 正哉殿

成田 大航殿

石川 征一殿

天嶽 院殿

浅香 清志殿

石川 孝禪殿

黒田 能勝殿

鈴木 紀元殿

大場 満洋殿

井上 葉智殿

増山 静江殿

出井 義章殿

黒田 トシ殿

関口 哲勇殿

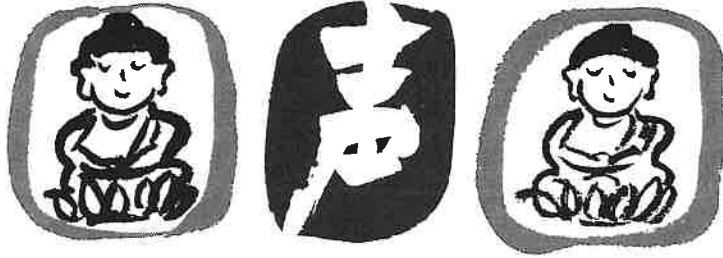
伴 大介殿

古谷 ミ工殿
佐貫八重子殿
吉野 宏殿
篁 素明殿
中野 良教殿
岡田 充時殿
河野富美恵殿
村上 博中殿
石川 良昌殿
松沢 福司殿
山本喜代司殿
小川 充生殿
庄司 晃殿
珍田 玲子殿
佐藤 勝宏殿
飯田 利行殿
蔵谷 光雄殿
岡崎 興道殿

伊藤 幹雄殿
珍田末四郎殿
河村 康雄殿
日野タキ子殿
清水 鈴子殿
黒河内貞子殿
星野 一男殿
石井 良昌殿
千葉 光子殿
遠藤 博因殿
門馬 秀範殿
藤田 正子殿
貞昌院 龜野哲雄殿
潮音寺 安藤康哉殿
福泉寺 岩波道俊殿
定光寺 大道晃仙殿

〈成寿賛助〉

長泉寺 柴田秀晃殿
瑞光寺 桑原大宗殿
常林寺 林秀頼殿
富永 豊重殿
伊藤 勲殿
宮本 延雄殿
黒田 トシ殿
大土素治郎殿
村上 則雄殿
伊藤 幹雄殿
飯田 利行殿
石井 修道殿
面川 勝治殿
松田 憲英殿
瀧澤 武雄殿
吉原木工所殿



「禅」は新しい境涯を開
く潤滑油

埼玉県
小野義彦様

過日は、慶安寺の荒木師共々
ご接待を賜り、育英生の辞令
交付式への随喜も叶い、いつ
ものことながら大変お世話に
なり、心より感謝申し上げます

おります。育英生の採用を受
けたスグノタント師は頭脳優
秀はご判断のとおりですが、
とても礼儀正しく気持ちの良
い青年僧で、今般方丈様のご
法愛に浴す好縁を賜りました
ことは、師のみの幸せでなく、
ひいては彼を応援するインド

ネシア全ての方々の幸せであ
ると確信致しております。今
伸び盛りの木が日陽を受け、
栄養を吸収するがごとく、奨
学金は豊かな仏法の実りへの
重要な投資となるに違いあり
ません。私も非力ながら師の
学業成就を祈念申し上げます
ります。

次に方丈様のもう一つの海
外支援でありますアメリカ方
面への活動につきまして、現
実を見据えた上で、僧堂の基
本的な姿に帰り、修行を自ら
行じることのできる指導者ま
たは指導者グループを中心に、
地球環境等を深く考慮した仏
教的社会活動を推進して行く

改めて感銘を受け

兵庫県
小川光生様

ご懸案の墓地、見事に完成なされましたことお慶び申し上げます。小生、一昨年六月、ナリスを退いてもう一年三ヶ月になります。専ら母（96歳）の介護の日々を過ごしており、近頃は大阪はおろか神戸三の宮も遠くなってしまうました。平成九年の正月に母が歩行不能となり寝たきり介護に入ってから久しく東京へも行っておりません。昨年スタートした介護保険制度の

恩恵を受け、電動ベッドや入浴サービスで助かっております。ショートステイもうまく利用しますと、四、五日の夫婦での旅行も可能ですが、なかなか母の体調と予定がマッチせず、これは利用が難しいところです。当分はしっかりと看て行くつもりでおります。そのような次第で善光寺様へのお参りも御無沙汰致しております。

昨秋出版されたPHP新書『自我と無我』（岡野守也著）を読んでおりまして（トランプ・スパイソナル心理学、ケン・ウィルバー氏のことを詳しく紹介されているのですが）、こ

の著者が深く心酔しておられるウィルバー氏は、禅を、前角博雄御老師のご指導の下に学ばれたことを知りました。残念ながら前角老師は早くお亡くなりになってしまわれましたが、こういう世界的な新境地に挑む思想家をお育てになられたことを知って、改めて感銘を受けました。御一統様の益々のご健勝をお祈り申し上げます。

小谷氏の霊前にて感謝の
読経

横浜市
摩尼三法先生

この度は「正力賞」受賞の

お祝いを過分にいただき、恐縮いたしております。誠に有難うございました。今夏はタイ国ウボン及びカンチャナブリ県の森林寺院と小中高校を20名ほどで巡回し、またスリランカの幼稚園の開園式に出席し、良い交流の場を持つことができました。明日からは

インドのダラムサーラを訪れ、寺院学校（チベット系）関係者にお会いする予定です。

先日、訪タイの折に小谷邸を訪問。亀太郎様の霊前にて感謝の読経をさせて頂きました。昨年、一昨年とお見舞いに伺った折にはすでに透析をされておられ、急に歳をとら

れたようにお見受けし心配しておりますが、こうしてご逝去に接してみると、小谷さんのご親切とタイ国を愛すお心が思い出され、悲しみで一杯でございました。訪タイの折にはまたご焼香にと考えております。

目標は善光寺方丈様の行動

福島県
吉岡棟憲宗師

第31巻を数える『成寿』をご送付賜り有難く心より感謝申し上げます。また横浜やすらぎの御霊園が見事に完成いたしましたことおめでたく重

ねてお喜び申し上げます。この霊園が単なる霊園事業に止まらず社会貢献事業、新しい教化活動に連動されますことをお祈り致しております。

私も八月末にラオスへ建設した四校目の小学校の開校式に列席して参りました。同じ仏教徒の子供たちへの支援と浄財集めに奔走していますが、いつも目標とし心の支えになっているのが善光寺方丈様の行動です。「地球は一つの村」と促えるスケールの大きさと寸暇を惜しまぬ積極行動を見る度、自分もできる範囲で頑張らなければと刺激されています。

「縁を結んで戴いて

足柄市
野中登志子様

霊園開園式、管理棟落慶式
おめでとうございます。安藤
先生を通して私もご縁を
結んで戴くとは夢にも思っ
ておりませんでしたのにとほんと
うに恐縮しております。また
このたびは『成寿』秋季号を
お送り下さいますして重ねてお
礼申し上げます。

成寿を読ませて戴きながら、
あるページで方丈様のことを
「男が男に惚れるというのか
なあ、あの方のためなら死ん

でもいいと思う時がしょっちゅう
ありますよ」と書いてあり
ました。現在このように目ま
ぐるしい世相の中で、死語に
近い言葉になっているのでは
ないかと思っておりましたと
きに目に触れ、驚きと共に私
の素直な気持ちです。方丈様
がどのようなお方が改めて知
りたくなりました。成寿を通
しまして私なりに思うのもま
た、楽しみの一つとして勉強
させて戴きます。ほんとうに
有り難うございました。





読者のために

興味深い記事等有難く拝読

横浜市 孝道山
岡野正貫統理

『成寿』秋季号ご惠送賜りまして有難うございます。豊富なカラー写真と共に有益な情報に満ち、特に猥下の「人生の指針」の有難いお言葉、また御寺正統継承者であられるご三男様はじめ二人の日本僧のタイ国仏教具足戒受戒式の実際の模様について詳細なりポート等、大変興味深い記事等有難く拝読させていただきます。益々の御発展をお祈りします。

「人生の指針」に感銘

栃木県
小林 孝棟

「成寿」31号拝受いたしました。盛大な「やすらぎの園霊園」と管理棟落慶式おめでとうございました。日頃『修証義』を愛唱しています私にとつて、御尊兄の「人生の指針」特に感銘を覚えます。タイ国での具足戒授与式ではご子息博志師を散見、改めてお祝いを申し上げます。先年、永平寺をお参りしたとき案内役が「黒田師のご子息も修行中ですよ」と仰言られたことを思

い出しました。

「子供は親の背中を見て育つ」

東京都

角家文雄先生

『成寿』第31号をお送りいただき有難うございます。この中でご令息・博志様のタイ国・ワットパクナムで修行をされるニュースに接し、感銘を受けました。今日、多くの寺院で男の子の寺離れが問題になっていますが、善光寺様ではお子様方が仏の道に入られてすばらしいことだと思えます。「子供は親の背中を見て育つ」と言いますが、黒田武志老師が

僧侶としての道を正しく歩んでおられるからだと思えます。博志様のタイ国での仏道修行の無事円成を祈念いたします。

目を見張る思いで拝見

新潟県

新井勝龍老師

『成寿』第31号ご惠贈いただき誠にありがとうございます。育英会より育つた皆様方の活躍、いつも目を見張る思いで拝見させていただいております。

時節柄ご自愛ご健勝ならんことを切にお祈り申し上げます。

「信念とご修行の力量と

東京都

大藪正哉老師

方丈様と善光寺さまのますますのご発展をお慶び申し上げます。横浜やすらぎの園霊園の開園まことにおめでとうございます。いつもながら『成寿』ご惠与下さいます。方丈様がとうございます。方丈様のご信念とご修行の力量と、東郷さんの布施行が目に見えるようです。ご自愛下さい。

たゆまぬ救世活動に感服

伊藤雄次郎様
栃木県

この度は、霊園並に管理棟落慶式典掲載の『成寿』31号をお贈りいただき有難うございました。黒田師のたゆまぬ救世活動に感服致します。また、私が常日頃感じておりますことは、横浜善光寺留学僧育英会の発展こそは、一個人僧の修行援助にとどまらず、今日、東南アジア諸国における、民族・宗教・貧困等に起因する痛ましい紛争の解決に役立つ、有徳の指導者の育成

という、平和貢献に絶大なる育英事業であると喜びを大にするものであります。

深き感動を覚え敬服

宮入紀雄老師
長野県

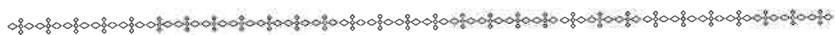
いつも精力的なるご活躍に敬意を表します。『成寿』をお送り下され読ませてもらいました。人はただ一人では生きて行けない、多くの物や人に支えられて生かされて行く世のならいでしょうが、人を育てたり物を育てたりは言うには易し行い難きことです。それを身を以て実行、実践さ

れておられる老師に深き感動を覚え敬服しています。これからもご壮健にて益々ご飛躍あらんことを山の中よりお祈り申し上げます。

転法輪具現化の数々

廣島一雄先生
藤沢市

『成寿』第31巻拝受仕りました。転法輪具現化の数々が誌上に躍如として示され、心魅かれます。なかでも東郷敏氏の「仏のこころ」一編の印象は鮮烈です。有難く御礼を申し上げます。



強き信仰の念

東京都
浜田智祥様

成寿を拝読させていただきました。善光寺さまの僧伽の和合、人びとへの思いやり、方丈様はじめ皆様の強き信仰の念をいつも感じます。世界仏教の流布、布教、教化の発信は善光寺から。そんな念（正念）を善光寺さまの僧伽の中に深く省察し、自己の中に深く位置づけております。

善光寺さまのさらなる仏法の敷衍を心より祈念いたします。

す。

大宇宙の真理を見る思い

横浜市
戸塚正美様

『成寿』31巻拝受、ありがとうございます。ご存じます。「横浜やすらぎの郷」の完成おめでとうございます。相変らずのご活躍、ブルドーザー僧侶の感があります。ご労作、『修証義』の解説と老師の人生訓は心温まる大宇宙の真理を見る思いです。また、福田兄の「上座部仏教」も拝読。黒田・福田両ご令息の修行に入る様子を通して、タイ仏教の現状を語る先生ら

しい稿も嬉しく読ませていただきました。

『大雄』の編集長を拝命して三年目に入り、第三種郵便物の認可も受けて軌道に乗ってきました。先日、石附山主老師と貴兄のご活躍の話をしたばかりです。くれぐれもお身体を大切に。

仏法の弘通の活躍がいよいよ興隆

埼玉県
大寺忠老師

『成寿』第31巻ご恵贈いただき誠にありがとうございます。貴山のますますのご繁栄の様子、お弟子様の具足戒を受け

られたことなど嬉しく拝読いたしました。貴山の衆生接化と仏法の弘通の活躍がいよいよ興隆されることを念じて御礼の言葉といたします。

興味深く拝読

小川英雄先生
東京都

『成寿』をお送り下さり、有難うございました。毎号、大変興味深く拝読しております。霊園落成のこと、育英会のこと、タイとの交流のこと、いづれも啓発されました。いつものように、学生たちに回覧したいと存じます。日本オリ

エント学会につきましては、お力添えいただき、心より感謝申し上げます。

素晴らしい言葉

林 博明先生
東京都

『成寿』31巻ご恵送賜りありがとうございます。二千年の特集「横浜やすらぎの郷」「タイ得度式」「黒田方丈様の長年の念願の気持ちが一言一言重く感じられます。国際的・仏法興隆と世界平和に貢献した」という一念の現れです。

この度は『修証義』第三章 P 29 上・下「南無」のインド

語と道元禅師の「礼拝が世に住まる限り仏法は絶えない」という素晴らしい言葉を教えていただき、ありがとうございます。益々の山門のご繁栄を祈念申し上げます。

夢が見事に結実

佐藤達玄先生
東京都

『成寿』第31巻ご恵送下され有難うございました。先ずもつて「横浜やすらぎの郷霊園」の開園心よりお祝い申し上げます。貴老師長年の夢が見事に結実したことは仏天の加護と共に不屈のご精進によるもの

であります。なおご子息博志師の具足戒授与式のお写真や東郷敏氏の「仏のころ」を拝読し、南方仏教の実態がよく分かり、大変勉強になりました。肉食妻帯の日本仏教はたしかに批判されても仕方ありませんが、よい解答が見つかりません。

時節柄ご自愛の上、さらなご発展をお祈り申し上げます。

お礼にかねて、近況のご報告

鎌倉市
塚本啓祥老師

ご健勝のこととお慶び申し上げます。また寺門の興隆、

国際的なご活躍、ご発展のごと大慶の至りに存じます。小生は宝仙学園短期大学学長を三月末（平成12年）をもって定年により退職致しました。週に一日、立正大学大学院に出講いたします他は、自宅にて執筆に専念いたしております。『成寿』第31巻ご恵送のお礼にかねて、近況のご報告まで申し上げます。

どこにもない尊いこと

横浜市
浦野フデ様

第31巻『成寿』ご恵送頂きこの上ない幸とむさぼり拝読

致しております。拝見致しておりますと「やすらぎの郷」が完成遊ばされおめでとうございませう。本当に素晴らしいと一人胸をたたいて喜びました。必ずお参りさせていただきます。方丈様の御立派な御心持の賜と、総てが完成して大勢の方々が方丈様に付いて行かれることはどこにもない尊いことと思えます。

銭（はなむけ）の言葉

島根県
津戸公子様

横浜やすらぎの郷霊園開園並に管理棟落慶誠におめでと

うございます。真つ赤な夕日に浮かぶ富士山を見に是非一度行ってみたいと思います。私ごとでございますが、九月に定年退職しました。この記念すべき時に『成寿』をご恵送下さり感激しております。東郷さんの「仏のころ」の中に東郷さんを変えた一つとして黒田方丈様が言われた「仕事というものは、自分がしたくてするものではない。仏さまがさせてくださるものだ。どんなに働きたいと思ってもできなくなるときがきつと来る。仕事を与えられているときは、感謝の心で精一杯働くこと…」とありましたが、こ

れは私への饒の言葉だと嬉しく思っております。ありがとうございます。うございました。

皆々様に感謝

大阪府
森廣正男様

『成寿』第31巻の恵本にあずかりありがとうございます。ややもすると多忙という流れで自己弁護する自分に『成寿』は立ち止まり洗心する機会を与えて下さいます。そしてまた歩き出すのです。東郷氏の仏彩人彩文筆には筆を通じての語りかけが伝わってまいり、いつの間にか自分もその中の

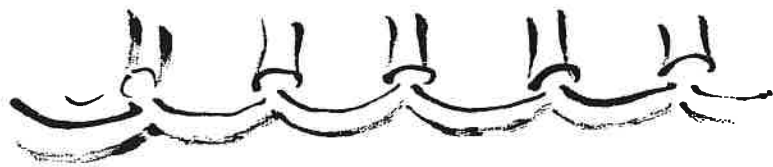
スタッフになつてしまいました。伊藤先生の表紙も自分の見る時の心を現わすのか同じ表紙も違う物に見えるのも不思議です。

ご住職様、皆々様に感謝。

大きな魅力と感動

大阪府
白山 誠様

開創三十周年おめでとうございませう。『成寿』31号で記念事業の横浜やすらぎの郷霊園等の完成写真や記事を拝読いたしました。心からお祝いを申し上げます。三十数年前に黒田方丈様にお会いして以来、



橫濱善寺
南無阿彌陀佛

三喜庵
印

師の人間臭さの中に大きな夢を語られるとき、他人と異なった目の輝きを強く感じておりました。ここに三十年の想いを現実にした師の情熱と心意気に再び大きな魅力と感動を覚えます。どうぞ今をスタートとしてもっと大きな夢の實現に向かってご尽力下さいませようお願い申し上げます。『成寿』の拝読を楽しみにしております一人です。

ご教導を感謝

茨城県
山口哲雄様

いつも『成寿』をご恵送頂

き厚くお礼申し上げます。お恥ずかしいことですが、仏法については全くの無知者である私でも、黒田師のご健闘ぶりを拝見して見ますと、社会の一隅を照らす仏法者のご努力が痛いほどに伝わってまいります。国を守り、人間を育てることが緊要の時代とあって、すごいことをなさっていると申し上げます。ご教導を感謝しております。

仏教を国際的に観ようとする目が拓かれて

鶴見女子中・高等学校
菅原節生先生

横浜やすらぎの郷霊園開園

並に管理棟落慶誠におめでとうございます。又このたびは、『成寿』31巻をご恵送賜り、有難く厚く御礼申し上げます。拝読しておりますと知らず知らずのうちに仏教を国際的に観ようとする目が拓かれてゆく感がいたします。巻末の表紙特集もおもしろく見させて頂きました。貴師の「願い」が益々圓成されますよう祈念申し上げます。

ご高德の賜

愛知県
岩田文有老師

日頃は二利ご円満のこと、

心からおよろこび申し上げます。『成寿』お送り下さいまして有難うございました。小谷亀太郎氏逝去に際しては何かとご配慮を賜り御礼もいたさず、まことに失礼を申し上げます。お許しのほど。ワット、パクナムでウエサカブーチヤに参加した人々、未に話題になり貴老師のご高徳の賜と深く感謝申し上げます。

勉強中の日々

福井県 永平寺内
前平武男師

『成寿』31号届きました。

ありがとうございます。私も八月末に忙しかった「受処」から「鐘洒」へ転役致しました。いつも聞いている鐘や鼓が実際に打つてみると難しく勉強中の日々です。とは言っても解合で二度目の「鐘洒」。今までとは比較にならないほど自分の時間がとれ、有効に過ごそう、本を読もうと思っていたので、ちょうど良いタイミングでした。友人にも好評でした。



有縁の絆で結ばれて

高知県
伊藤賢二様

成寿山善光寺に集える皆様、ご清栄大慶に存じます。絶対不可能なる世界恒久平和の理想を掲げ、道元禪師の教えのもと求道、否修道の精進を共に成される方々は、これみな有縁の絆で結ばれているのでしょう。修道の普及には人、時間、物、場所、金銭が絶対に不可欠であり、これは立派な経済活動と言えます。異端を学んだ者の中には、「善い人、普通の人、悪い人と分けた奴

が一番の悪い人であった」の
思いのある中、成寿山善光寺
の皆様方の今後に光あれと祈
りおります。

壮快な気分になつて出て

横浜市
大和田ハル様

日頃お世話になつておりま
す。いつもご本をお送り下さ
いまして誠に有難う御座いま
す。厚く御礼申上ます。私は
老人の身ですので毎日時間を
見て楽しみに読ませて戴いて
います。笑うことの多い本で
すのでとても浮き浮きした気
持ちになり、壮快な気分にな

さが出てきます。一日も長生
きしたいと思つて暮らさせて
戴いています。

私たちの喜び

横浜市
玉那覇 勇様

方丈様には益々ご健勝のこ
ととお喜び申し上げます。先
日は誠に有難うございました。
土、日と大変お忙しいにもか
かわらず、母トミ、父、祖父
母の戒名を頂き、大変有難く
感謝致しております。母はじ
め、父、祖父母とも天国にて
喜んでいることと思ひます。
立派な戒名で光榮に思つてお

ります。方丈様に直接お話で
きましたことは私たちの喜び
でした。四九日の法要、仏壇
の開眼供養等よろしくお願い
いたします。今後ともご指導
よろしくお願い致します。

宗風の宣揚と宗勢の確立
に精進したい

茨城県
村上則雄様

世界は一つの理想に向つて、
布教並に行事の展開に精進さ
れておる老師の不惜身命に、
敬意を表しております。こ
の度のやすらぎの郷霊園落慶
誠におめでとうございます。
今後益々宗風の宣揚と宗勢の

確立に同人として精進したい
と思います。

普く人々に敷衍されるこ
とを確信

横浜市 鶴見大学

落合一恵様

平素、方丈様の仏法興隆へ
のご情熱と檀信徒教化の実践
には、心から敬服させていた
だいております。

今般は文字どおり檀信徒の
方々の心のやすらぎの郷霊園
の完成、管理棟落慶と重ね重
ね本当におめでとうございま
した。方丈様のご発心が普く
人々に敷衍されますことを確
信いたしております。

この度『成寿』31号をご恵
贈賜り早速学園関係者にお届
けさせていただきます。たび
たびの御心遣い誠に有難く、
かつ恐縮に存じております。

お志の大きさ

北海道

古谷ミエ様

善光寺様にはいつも有難い
お心を賜り、この度も『成寿』
の特集号をお送り下さいまし
て、有難くお受けとり致しま
した。このきびしいご時世に
もかかわらず大層な大事業を
成し遂げましたことに、横浜
善光寺様の方丈様のお志の大

きさに唯々うらやましく又、
御苦労様、おめでとうござい
ましたの言葉のほかございま
せん。私たちはお世話になる
ばかりで何もできず恥ずかし
いです。

これからお体を大切に益々
のご繁栄をお祈り申し上げま
す。

心から感謝

茅ヶ崎市

黒田トシ様

『成寿』をお送り下さいま
して有難うございました。子
供達の支えと成寿を読ませて
いただき、一番の幸福を感じ

ております。

先日お彼岸供養に法正様に
黒田省吾祖父の百回忌の供養
をさせて頂いた頂きました。黒
田達三父は仏心の深い人だ
したので喜びと安心をしてくれ
たと思います。健康であった
ことのお陰様と皆様とのご縁
から本当に嬉しく、心から感
謝致しております。

私は幸せ者と感謝

東京都
伊東政子様

栃木の実家でできた新米を
お届け致します。どうぞお召
し上がり下さい。新潟の魚沼

産のお米は最高と聞きますが、

私にとつては尊敬する両親が
作ってくれたお米は世界中で
一番おいしいと思っております。
そしてそのお米を日常食
べられる私は幸せ者と感謝致
しております。春には緑が、
夏にはかんぴょうが、秋には
黄金色の田んぼが、そして冬
には冷たい空っ風が私たちを
迎えてくれます。遠く男体山
の姿を見ながら育った私は、
貧しかったけれど、優しくて
暖かかった故郷に、両親に、
いつも感謝しております。遠
く離れているからこそ、思い
は強いのでしょうか。

善光寺様の益々のご発展を

お祈り申し上げます。



留学育英生からのたより

日本在住

第17回育英生 鄭 貴霞氏（台湾）

理事長 黒田武志殿

この度、成寿山善光寺開山樸庵白純大和尚の齋会と育英僧の辞令伝達式に参加できまして、また奨学金を頂くことができましたことを厚くお礼申し上げます。

4年前、私は関西に飛行場があるのも知らずに成田飛行場から夜行バスで高野山に行きました。2年前京都に来てからも、また京都から出たことがなく、毎日図書館と研究室にばかりおりました。それで外界との接触が薄らいでいたと思います。横浜に行くことが決まったとき、新幹線は高いと思い夜行バスを選んだのですが、残っていたのは後方の席で、7時間も揺られてようやく横浜に着くという難行の旅になりました。幸い一日早く着いたので、上大岡の旅館で17時間休んでから善光寺様にお伺い致しました。その前に角の石材店で黒田理事長一行の中国訪問や、理事長の若き日のご苦勞を書いた本を読ませて頂きまして、初めて善光寺についてのことが少し分かったのです。

僅か5時間の滞在でしたが、釈迦堂での儀式の最高の荘厳さに感動致しました。皆様のスピーチの通り、理事長殿の細かい心遣いが私にひしひしと感じられました。それは私の周りに私と親しい人達を配置致して下さったことです。特に知らないお方からの暖かいお言葉、「身体を大事に」は、日本へ来て初めて出会った利他の行動に思えました。私はあの時善光寺に和気が溢れて、平和そのものである皆様に祝福するとともに、その和気に触れて私も深い感銘を得ました。

ところで皆様は駒澤大学のグループと思います。4年前私がアメリカを離れる時にサンフランシスコのミルブレイで、東京の片岡佑介氏に逢いました。彼は駒澤に入りなさいと勧めて下さいましたが、その時私は密教を勉強するつもりで手続きをしたので、高野山に行ったのです。授業料を払ってから別科は進学できないと知りました。それで片岡氏に電話をして事情を話し駒澤大学の入試資料と3年の試験問題を送ってもらいましたが、駒澤の試験は早期なので試験準備の時間がないことさえ伝えずに、私は1ヶ月後試験の花園大学を選択したのです。これが眼に見えない縁でありましょう。今日また駒澤の皆様のお世話になってそう思いました。なんだか奇妙な感じが致します。

日本に来て4年になりますが、前述のとおり研究室にいて日本の習慣や礼節に対して特に気を付けてこなかったのが、粗相や、また非常識なことがあったと思います。どうか悪しからずお許し下さい。

最後に最高の敬意を表して、善光寺様の今後の御発展を祈念致します。

謹呈 合掌

2001年 2月12日



Foreword

The chief priest of Zenkōji—Temple
Takeshi Kuroda

We entered 2001, the 21st century and now the summer clad in fresh greenery has come after the spring full of flowers. I am in a trance hearing songs of birds and surprised to find out the half of the year has already passed. The saying that time flies is really true. As we often said before, Zenkōji-Temple trying to create rich feature wishes to pray for the prosperity of Buddhism and peace and happiness of mankind in the new century.

The summer volume of “Seiju” featured the educational foundation Sōji Gakuen(Tsurumi University, the same Junior College, Tsurumi Women’s Junior High School and the same High School), which was founded by Sōjiji-Temple in the 13th of Taishō to revive the spirit of the founder of Sojiji-Temple, the Rev.Keizan, “petition for women’s attaining Buddhahood. The name of the school at that time was “Kouka Women’s School”, though the University and The Junior College (except some parts) are now co-educational to go with the current. The School has distinctive educational principle which are “attaining Buddhahood, gratitude and practicing asceticism” as

its indexes and four teachings “offering, loving words, practicing and presence of mind” as its targets to practice.

The Rev. Keizan inherited the way of the Rev. Dogen, spread the teaching of Zen of which target is “people’s attaining Buddhahood” as the top priority.

He established many temples, produced pupils and devoted to spread Sōtō Sect. The Rev. Dogen is looked up to as “Kousō” and the Rev. Keizan as “Taisō” and as “the Rev. Jōsai” which means the founder, father and mother of our sect.

The self-possession” taught by the Rev. Keizan is the calm state of mind free from the spurs of outside world and inside of oneself, it is never changing peaceful world. This is exactly Buddhists’ way of living and also the real beautiful life if you have sure feeling of life in the multifarious world. We wish to learn this teaching and to practice the peace and the prosperity of the world in new century.

編集後記

▼『成寿』第32巻をお届け申し上げます。本年は善光寺開山楳庵白純大和尚の二十三回忌にあたり、去る二月法要を厳修いたしました。改めて師父の業績に思いを深くしました。同時に善光寺海外派遣留学僧の辞令伝達式を行いました。育英生が百人を超え、派遣国も21万国となり、各方面からの注目度も高まっております。ご開山もさぞお喜びのことと思っております。

▼本号は学校法人總持学園を特集いたしました。学園関係の高崎直道先生、菅原節生先生、瀬戸皖一先生、大三輪龍彦先生、佐々昌樹先生にはご多忙のところ玉稿をお寄せ戴き、心からお礼申し上げます。学園は創立76年を迎え、中・高・短大・大学・

大学院と多くの卒業生が各方面で活躍されていることは、宗門にとっても喜ばしいことと存じます。今後の益々の発展を願っております。

▼佐々木宏幹老師から現代中国の観音信仰について玉稿を戴きました。興味深い内容で、改めて観音信仰の高まりを知ることができました。ありがとうございます。

▼善光寺ゆかりの鎌田茂雄先生、鏡島元隆先生、阿部慈円先生には鬼籍に入られ、永遠のお別れをしなければならぬことは筆舌に尽しがたく心からご冥福をお祈り申し上げます。先生各位にはご生前あたたかいご指導と力強いご支援を賜りました。篤く篤く御礼申し上げます。

▼昨秋、黒田方丈の母校栃木県大田原小学校昭和25年3月卒業6年5組同級会ご一行が善光寺と横浜市内で会合し、四十年振りの再会に小学生

時代を懐しみ宴は盛大でした。参加された皆様から善光寺育英会に過分のご寄付も頂戴し、「持つべきものは友」と感謝々々でした。

▼善光寺には駐車場がなく、長い間ご不便をおかけしてりましたが、このたび土地を購入する運びとなりました。用途につきましてはいずれご連絡申し上げます。

▼七・八月はお盆の月です。お盆の意義を今一度考えてみるのもこの時期ならではの大切なことでもあります。施餓鬼会には参加いたしましたよう。

成寿 第三十二巻

平成十三年六月二十五日発行

発行所 成寿山善光寺

横浜市港南区日野中央一丁目
十二番九号

電話 〇四五(八四五)一三七一

FAX 〇四五(八四六)二〇〇〇

印刷所 神奈川新聞社出版局





横濱善光寺